

平成24年度 産業界のニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」

成果報告書

学校法人藤ノ花学園

豊橋創造大学短期大学部

目次

はじめに	1
1. 『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』概要説明	3
2. 文部科学省申請概略	7
3. 事業グループ活動報告	13
3. 1 4つの教育事業	15
(1) 長期にわたる就職活動に耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施	
(2) アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施	
(3) 地域組織と連携した「プロジェクト活動」	
(4) 「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有	
3. 2 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備・連携推進	23
3. 3 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援	27
(1) ユビキタスキャンパスグループ	
(2) 大学コミュニティグループ	
4. 補助資料	37
① プロジェクト演習成果報告書（教員）	39
② プロジェクト演習協力企業・団体一覧	65
③ 発行済パンフレット	69

はじめに

本報告書は、平成 24 年文部科学省にて採択された『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』の活動とその成果を取りまとめたものである。この事業は、三重大学を代表校とした中部圏 23 大学による「アクティブラーニングを通じた教育力」および「地域・産業界との連携力」を通して、教育改革力を強化する取組である。本学情報ビジネス学部ならびに短期大学部キャリアプランニング科は、東海 A チームに属して幹事校と副幹事校からなる中部地域大学教育改革推進委員会の調整のもと、連携 FD を通して教育改革の実践過程で生まれる成功と失敗を共有しつつ教育力を高め、中部圏産学連携会議を通して大学が育成しようとする資質と地域・産業界のニーズに関する対話を行うために『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』を展開するものである。このプロジェクトでは地域・産業界のニーズに対応した能力を育成するため、学生参加型授業、共同学習、課題解決学習や PBL などを教育現場に取り入れ、就業力に関わる学生の能動性を高める改革を進めるとともに社会現場での実践教育としてのインターンシップを高度化するものである。

本学では『大学生の就業力育成支援事業』として、これまで情報ビジネス学部・経営学部と同短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた「持続型職業人 SOZO プロジェクト事業」を発展させ、『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』として次の 4 事業を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図るものである。

豊橋創造大学短期大学部

地域産業界連携教育力改革プロジェクト

- ① 長期にわたる就職活動を耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施
- ② アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施
- ③ 地域組織と連携した「プロジェクト活動」
- ④ 「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有

本報告書をご覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

2013 年 3 月

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」

事業推進責任者

豊橋創造大学情報ビジネス学部長 佐藤勝尚

1. 『地域産業界連携教育力改革 プロジェクト』概要

地域産業連携教育力改革プロジェクトの概要

1. 産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備

本補助事業は、産業界ニーズに対応した人材育成を大学や短期大学などの高等教育機関で実施するための体制整備を進めるための補助事業として、平成24年度に文部科学省に創設された事業である(以下「産業界ニーズ補助事業と呼ぶ」)。中部圏では、「アクティブラーニングを通じた教育力形成」「地域・産業界との連携力形成」を目的とした事業を 中部圏23大学の共同事業として申請して採択されている。中部圏23大学では、主に教育力を探求する「東海A(教育力)チーム」、産業界ニーズ把握方法を探求する「東海 B(産業界ニーズ把握)」、「北陸地域チーム」、「静岡地域チーム」の4グループに分けて、教育方法や産業界ニーズ把握方法について考え方や方法論を取りまとめるとともに、それらを共有することによって、教育力向上を目指す事業になっている。

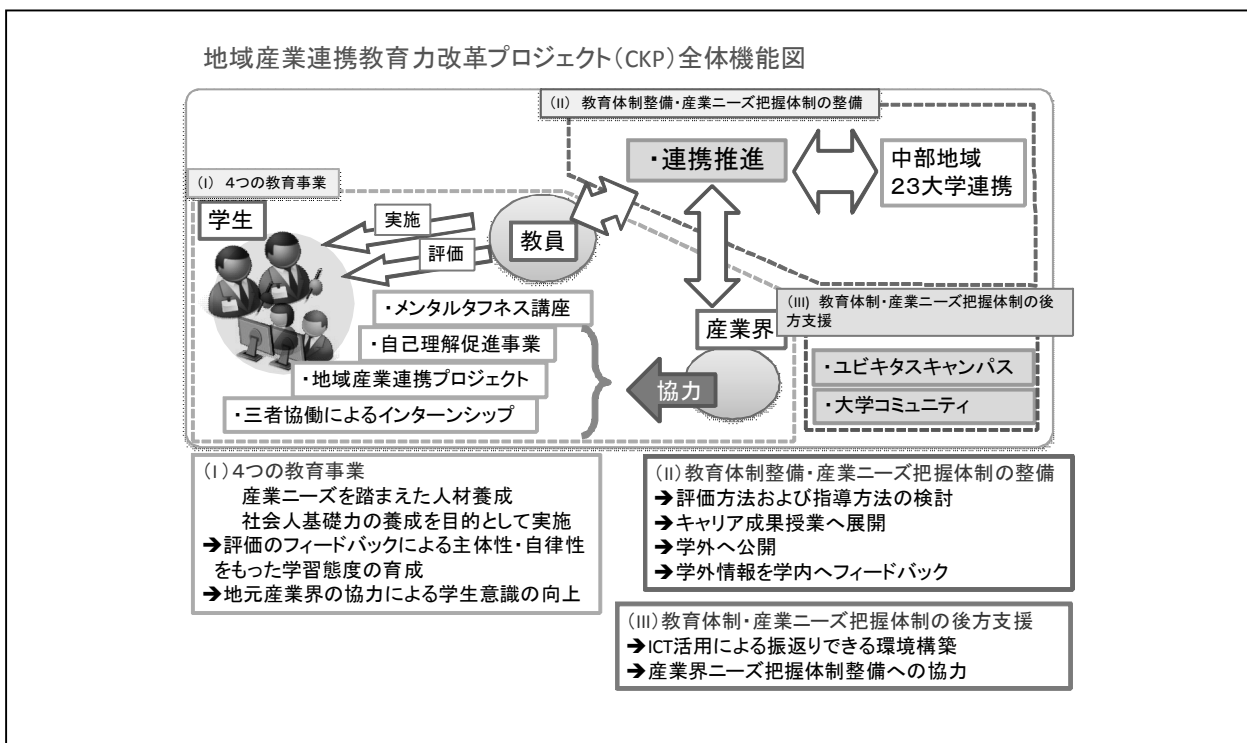
2. 地域産業連携教育力改革プロジェクト

豊橋創造大学では、「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備」(産業界ニーズ補助事業)への参加にあたって、育成すべき資質とその教育体制および産業ニーズ把握方策について検討し、「地域産業連携教育力改革プロジェクト」(以下、CKPと呼ぶ)として、教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備を推進することになった。

豊橋創造大学では、ディプロマポリシーで定める就業力育成を目指す。具体的には、社会人基礎力を養成できる教育システムの構築を行う。また、人材養成に関する産業界ニーズを把握する体制整備を行う。そのために

- (I) 4つの教育事業
- (II) 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備
- (III) 教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援

の3つの機能を実行するグループを組織化した。これらの担当教員と事務職員で「地域産業連携教育力改革プロジェクト(CKP)」とその運営のための委員会を設置して、事業実施することになった。これらの機能全体を以下の図にまとめる。



3 地域産業連携教育力改革プロジェクト実施体制

本学では「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備補助事業」を「地域産業連携教育力改革プロジェクト（CKP）」として実施する。「アクティブラーニングを通じた教育力形成」「地域・産業界との連携力形成」を目的として育成すべき資質とその教育体制および産業ニーズ把握方策のために、3つの機能を有したグループの役割を分離して組織化して事業展開を行う。

（Ⅰ） 4つの教育事業

- ・長期にわたる就職活動を耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施
- ・アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施
- ・地域組織と連携した「プロジェクト活動」
- ・「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有

（Ⅱ） 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備

（Ⅲ） 教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援

- ・ユビキタスキャンパス
- ・大学コミュニティ

これらの事業詳細は、次節以降で説明する。

2. 文部科学省申請概略

文部科学省 大学教育改革推進事業

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」

中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化 本学取組について

本学取組名称	地域産業界連携教育力改革プロジェクト
選定年度	平成 24 年度
<p>○学生の社会的・職業的自立のための取組のこれまでの実績について</p> <p>・これまでどのような方針・視点を持って取組を実施してきたか</p> <p>豊橋創造大学短期大学部キャリアプランニング科の教育目標は、「社会人として求められる基礎学力、教養やマナーを身につけさせると同時に、健全な勤労観、職業人意識を育成し、時代の要請に沿った専門的教育を施し、社会に貢献できる人材を養成すること」である。その教育目標を達成するためのカリキュラム構成であるが、受け入れる入学生が希望する将来の進路の多様化に対応するためにいくつかの専門ユニット群を用意する一方で、どの分野に進むにしろ社会人として要求される基礎力を培うためにコアユニットを設けている。全員必修のコアユニットでは、いわゆる社会人基礎力を養成するため、ビジネス文書を中心とした文書作成能力、計算・論理的思考力、情報リテラシー、経営の基礎、実務英語、マナーなどを修得する授業を、演習を取り入れながら実施している。教員は一方的な授業にならないように工夫し、ことあるごとに学生が苦手とする発表を課し、学生の側も授業に積極的に参加し、社会から要請されているコミュニケーション力を伸ばせるような機会を提供している。本科の名称を冠する「キャリアプランニングⅠ／Ⅱ」および「ビジネス実務総論」の授業では、働く意味を考えさせ、健全な勤労観、プロ意識、責任感といった職業人意識を身につけさせ、将来の職業的自立を支援する取組の基盤としている。これまでのすべての取組は、学生を人間的に成長させ、成熟させ、自立した人生を送ってほしいという意図から実施しており、従来から、上記の正課の授業と連携して、就職率を向上させ早期離職者を減少させるための課外活動を実施してきている。現在、ほとんどの大学が実施しているインターンシップについては、「インターンシップ」という言葉が流行る以前から「企業実務実習・病院事務実習」として実施してきている。また、時には学外の社会人講師を招き、学生に実社会を紹介する講演会を実施してきた。例としては、前早稲田大学ラグビー部監督・中竹竜二氏による「挫折と挑戦」というテーマでの講演会、東愛知日産社長・青木公貞氏による具体的雇用環境についての講義などがあげられる。</p> <p>平成 21～22 年度・大学教育・学生支援推進事業【テーマ B】では、「正課の授業と連携した総合的なキャリア教育支援」をテーマとして取組み、これまでの活動を学生が順序立てて学んでいけるような体系に整備した。具体的には6つの柱、「コミュニケーション力育成」「職業人意識の醸成」「自己理解」「ビジネスマナーの修得」「就職情報提供」「教員のFD研修」をキーワードとして諸活動を充実させ、学生の社会的・職業的自立を後押しする仕組みをつくりあげた。現在でも、それらを継続し、より発展・充実させて実施している。</p> <p>平成 18～20 年度・現代的な教育ニーズ取組支援プログラムでは、「食をテーマとした地域活性化」という取組で、地域貢献を伴う実践的教育を行った。「食農教育」「食文化の伝達」「福祉サービス」「災害時炊き出しボランティア」という4つの分野で3年間にわたりいろいろな活動をした。「食文化の伝達」活動の中で、「地産地消」ということで地元の野菜を使った郷土料理を小学生に教える取組を行ったが、その取組は平成 24 年の現在でも、豊橋の公共施設「こども未来館ココニコ」での「大学生コックさんのクッキング教室」として継続実施しており、知識に基づいて実践するよい機会であり、本科で調理を専攻する学生の職業的自立にも貢献している。</p> <p>平成 22～23 年度・大学生の就業力育成支援事業では、「持続型職業人 SOZO プロジェクト」という取組で、「早期離職防止を目指したメンタルタフネスとスキルの育成」をテーマとして活動した。年2回「メンタルタフネス育成講座」を実施し、学生はメンタルタフネスの基礎</p>	

知識とモチベーション・コントロールの手法を学んだ。大学で学んだ知識を実践の場で活用する試みとして、ゼミの時間を活用して「プロジェクト活動」を実施した。2年間の試行錯誤期間を経て、これらの取組は、平成24年度も、より充実したものにするべく継続実施している。

上記3つの取組の具体的成果は、活動報告書として冊子にまとめてある。

・これまでの取組の成果を、どのようにカリキュラム・ポリシーに反映させてきたか

上記のような取組を踏まえ、平成22年度に3つのポリシー（アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー）を整備した。本科の教育目標に基づいてディプロマポリシーをまず書き、これまで受け入れている学生の現状を加味してアドミッションポリシーを作成した。その後、その2つの差分を埋めるにはどうしたらよいかという視点からカリキュラムポリシーを書き、3つのポリシーの整合性をとった。これらのポリシーは「教育方針」として大学のホームページで公開し、オープンキャンパスでも高校生に説明している。カリキュラムポリシー冒頭に掲げている本科の教育目標は、具体的に6つの項目（社会人基礎力、職業人意識、マナー、教養、知的能力、専門知識）に項目化し、それぞれの能力分野をどの科目群で対応するのか明示している。「キャリアプランニングⅠ・Ⅱ」の授業内容には柔軟性を持たせ、高校から短大への円滑な接続を目的とする初年次教育としても機能させている。知的基盤としての「教養」は、生涯教育の出発点としても重要だと考え、学生が自由に選択できる「基礎教養ユニット」として配置している。これまでの先入観で科目を選ばないように指導しており、未知の分野と出会える機会になることを期待している。専門的な知識と実務能力を体系的に学べるようにいくつかの「専門ユニット」を設置し、学生に選択させている。学生の履修状況に応じて、各「専門ユニット」内の科目を増減したり、受講生の集まらない「専門ユニット」は廃止したり他のユニットに統合したりしている。正課外で実施していた就職支援活動の一部は、より一層の成果をあげるため、必修の正課授業に取り込むようにしている。「特別研究セミナー」は、これまで学んできた知識を、具体的な課題にあてはめて考える力を身につけるために設置している。

個々の科目については、毎年、科目名称は同じでも内容や教え方を見直したり、学生の要望・時代の要請に応じて入れ替えを行っている。1つの具体例を挙げれば、平成24年度から「ライフ・コーディネート」という科目を増設している。この科目では「お金」の面からライフプランニングを学び、幸せな人生を送るための知識を提供している。現在の学生には、税金、健康保険、年金、貯蓄、ローン、相続といった実際的な知識が欠如しており、そのことが将来の自立に大きく影響すると考えるからである。

このように、カリキュラムは固定したものを単調に繰り返しているわけではなく、教員のFD活動の成果を反映させたり、いろいろな取組の反省にもとづいて見直しを続けている。

○本事業において実施を計画している内容について

・短大における人材育成の現状と産業界のニーズとのギャップについて

短大における人材育成の現状と産業界のニーズとのギャップについて議論する際、よく指摘される点のひとつに「学生の主体性の欠如」がある。これは、短大生が入社してから、与えられた仕事をするだけで満足してしまい、どうしても周囲からの指示を待つ状態になりがちであり、これまでの仕事のやり方の改善に取り組むとか、現状のやり方の問題点を自ら発見し、抜本的な解決方法を工夫するといった積極的な姿勢が欠けているという指摘である。厳しい経営環境の中、企業は社員の少数精鋭化を進め、社内で人材育成をする余裕を失い即戦力となる人材を求めているが、新入社員の中には上司から与えられた仕事しかやらない人材も見受けられるようである。心配りができ、よく気がついて物事を先取りして対応しておいたり、全体の仕事の流れを俯瞰して自分のやるべきことを率先してやる、といった姿勢が実社会から求められているのである。一方、学生の立場から見れば、決して学生の能力が欠如しているわけではなく、たまたまこれまでの人生経験において、自ら課題を見出し、

それを解決するような機会を与えられてこなかったせいだと言うこともできる。大学全入時代においては、高校教育と大学教育の円滑な接続のために、各大学の学生支援がますます手厚くなる反面、学生が自ら行動を起こし主体的に活動する機会や、先入観にとらわれず物事を解決していく経験が減少してしまっているのではないかと懸念される。そのため、本科においては、学生の主体性を引き出し、産業界のニーズに応えるために、産業界ニーズ事業：東海Aチームにおける取組みにおいて「アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証」の具体的展開を他大学と連携を取りながら以下の4つの事業を計画し実行する。

※「持続型職業人SOZOプロジェクト」事業について

「就業力育成支援事業」である「持続型職業人SOZOプロジェクト」は、継続事業として平成24年度も実施していくが、今回、過去2年間の取組を発展・充実させ、「就業力」育成のより一層の充実を図るため、アクティブラーニングの手法を活用し、新たに事業展開する。

① 長期に亘る就職活動に耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施

今回は、年2回の「メンタルタフネス育成講座」を実施する。1回目は、「ストレス」の基礎理論、2回目は「セルフモチベーション」講座である。知識を伝達する座学に加え、課題演習の機会を多く設け、学生が主体的に学習する場とする。アクティブラーニングの手法のうち、5～6人のグループに分けて実施する「グループワーク」や、グループ内での「ディスカッション」を積極的に取り入れ、学生にやる気を出させる工夫をする。各グループでまとめられた意見は、全員の前で「プレゼンテーション」させる。ステップごとに、「振り返り」シートを書かせ、学んだ内容の確認をさせる。メンタルストレスをコントロールし、リラックスするためのノウハウは、これから一生活用できるものであることを理解させる。

② 度胸をつけ、臨機応変に対応できるための採用面接担当者の擬似体験（ロールプレイ）

就職試験では、最終的には面接試験での言動・振る舞いが採用かどうかを決めることになる。このプログラムは、学生に面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験させるものである。特に、通常は経験することのない「面接担当者」の立場を体験させることによって、企業側の人事担当者がどのような視点から学生を評価しているのか、わからせることが主眼である。学生に企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させるのに役立つのである。具体的には、まず学生に志望企業に対する志望動機や入社後のそうありたい姿を事前に考えさせた上で、自分を積極的に売り込む模擬面接を実施する。面接担当者はキャリアセンターの職員や、社会人経験のある教員によって行い、実際の面接試験に近い形で実施する。学生は教職員からのフィードバックにより、志望業界、志望企業や志望職種に対する理解を深めることができる。次に、模擬面接が終了した学生は、今度は面接する側として面接担当者側に着席し、他の学生の面接の様子を観察したり、面接担当者の1人として質問したりする。学生は、この経験により、他学生の良い点や改善点を自分の場合に照らし合わせて学んでいくことになる。最後にグループごとに学んだ内容を「ディスカッション」させて、「グループワーク」の成果として、各グループに「プレゼンテーション」させた後、教員が総括し、学生に「振り返り」を促す。

③ 地域組織と連携したプロジェクト活動

地域組織・企業と関わりを持ちながら、企画・計画・実行するプロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの運営を通して、学生自らが主体的に学ぶ「SOZOプロジェクト」を推進する。これまで学んできた知識が、実社会でどのように活用されているのか知る機会となる。学内だけの閉じた活動ではなく、学外へ出かけて行く何らかの「フィールドワーク」を含んだ活動である。実際のプロジェクトでは、いわゆるPDCAサイクルを回しながら物事を進め改善していく「プロジェクトマネジメント」の手法を経験する。プロジェクト全体を「タスク」に切り分け、段取りよく物事を進める手法を学ぶ。前もってリスク要因をリストアップしておくといったプロジェクト成功のノウハウを身につけていく。プロジェクトによっては、企業人のものの考え方、企業での仕事の進め方を垣間見ることになる。このプロジェクトマネジメントの知識は、パーソナル・プロジェクトマネジメントとして物事を進める視点を学生が持つことになり、将来ずっと使えるスキルであることを教える。

パソコンを活用した正課授業のリテラシー教育に加え、各学生に1台ずつ貸与した携帯情報端末（iPad）を活用し、就業後にも活かせるスキルを育成する。

プロジェクト活動では、教員の側は学生の主体性を引き出す「ファシリテーション能力」を問われることになり、教員の教育力育成にも役立つ。

④ アクティブラーニングの手法を使った教育経験の共有

「社会人基礎力」といったジェネリックスキルの育成は、初年次教育をどう進めるかといった問題とともに、どこの大学でも試行錯誤している課題である。各大学でのFD活動を活性化し、連携大学間で共有する仕組みをつくりたい。あらゆる局面で、アクティブラーニングの手法として5つ要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を含むような活動を展開し、上記の活動の高度化を図っていく。連携大学間のFD活動合同報告会といった研究会において、各大学の教員・学生代表がプレゼンテーションを行い、お互いの評価・フィードバックを行いながら、各大学の教育力のレベルアップを図りたい。これらの成果は、ホームページで公開し、連携していない大学にも広めるようにしたい。

上記のように、アクティブラーニングの手法を最大限活用して、メンタルタフネス育成講座やプロジェクト活動を中心とした4つの事業を展開し、学生の主体性を育み、産業界のニーズと大学における人材育成のギャップを埋めるような活動としたい。

・支援期間終了後の運用について

支援期間終了後も、連携大学間や協力企業との関係を維持発展させ、アクティブラーニングの手法を使いこなす経験を蓄積し、お互いに水平展開するようにし、他地域へもホームページや活動報告書による情報公開を積極的にすすめる。本事業を通して教職員のFD活動・SD活動を活発にし、学生の大学生活をより充実したものにする努力を続けることは当然のことである。

3. 事業グループ活動報告

3. 1 4つの教育事業

3. 1 4つの教育事業

これまでの経緯

平成 22 年度に文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業」の採択を得て、「持続型職業人 SOZO プロジェクト」という取り組みを始めた。その取り組みは、「メンタルタフネスの育成」、「プロジェクトの実践」、「ユビキタスキャンパスの実現」、「大学コミュニティを活用した社会人基礎教育の展開」といった活動から構成されており、平成 23 年度は精力的に活動した。残念ながら事業仕分けの影響を受け、文部科学省の援助は中断されたが、平成 24 年度に入ってから本学独自の「持続型職業人 SOZO プロジェクト」活動は継続実施していた。

平成 24 年度秋に文部科学省の新たな「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」（以下、産業界ニーズ GP と略称する）の採択を受けたので、他大学との連携活動を中心軸にして、既に継続実施していた事業を見直し、すべての事業内容を深化・発展させている。

平成 23 年度から開始した事業で今回の補助金対象とならないものも、その意義は変わったわけではないので本学独自予算で継続実施している。

補助金対象の「産業界ニーズ GP」部分の取り組みは核となる 4 本の柱を据えて構成してあるが、それらが相互の関連を深めながら相乗効果を上げるように努力した。平成 24 年度は 3 カ年計画の初年度であり、期待通りの成果を上げることができた部分がある一方、平成 25 年度から改革していきたい課題もいろいろ明らかになった。

以下、4 つの柱のそれぞれについて互いの関連性を念頭におきながら、取り組み内容、今年度の成果、今後の課題について記述する。

1. 長期にわたる就職活動に耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施

就職活動は、就職ガイダンスが始まる 1 年生の 10 月から 2 年生で内定が得られるまでの長丁場となっている。その間に、学生は就職試験や面接で挫折を経験し意欲が低下したり、内定先に就職した場合でも比較的早期に離職してしまう残念な場合を見てきた。そのような現状に対応するために、この講座を実施することにした。

新 1 年生に対してメンタルタフネス育成のために、入学直後の 4 月上旬に「メンタルタフネスベーシック講座」、夏期休暇前の 7 月下旬に「セルフモチベーション講座」を実施した。ベーシック講座では、ストレスの基礎理論、気分転換をうまくはかるリラクセス法、などを教えている。モチベーション講座では、モチベーションの基礎理論・コントロール法を教えている。学生時代にいろいろなものに貪欲にチャレンジしておく生き方が、将来ストレス解消の気分転換にも役立つ機会を与えてくれることをアドバイスしている。

「ストレス・コントロール」は、経済産業省の提唱する、いわゆる「社会人基礎力」の要素としても採り上げられており、いろいろな活動をする際の基盤となる力である。

この講座は外部講師によるものだが、教員も参加して、正課外の授業で学生の興味をどう引っ張っていくのか大いに参考にしている。この取り組みはアクティブラーニング強化の一環として、グループワーク主体で進めており、学生がお互いを知るよい機会ともなり、参加学生の高い満足度を得ることができた。グループごとに討議したり、グループの意見を皆の前で発表したり、振り返りの場面を何度も設定してあり、いわゆる「初年次教育」としても機能している。この講座の実施により、例年よりも通常授業や行事に欠席する学生が減少するという嬉しい効果も得られた。

これからについてであるが、現行の正課外講座(のべ2日間)の形はうまくいっていると考えている。ストレスコントロールは処世上のスキルであり、就業前からの取り組みは先進的なものだが、あまりに力を入れ過ぎてもこの講座の存在自体が学生のストレスになる面もあることがわかり、いろいろ不十分な面はあるにしろ現状が妥協点ではある。

《主な行事》

(1) メンタルタフネスベーシック講座

開催日：平成24年4月7日(土)

会場：豊橋創造大学 A32 教室

参加人数：キャリアプランニング科1年生 77名

教職員 16名

講師：キャラメルソース(株)代表取締役 初見 康行 様

(2) メンタルタフネスセルフモチベーション講座

＜キャリアプランニング科1年生＞

開催日：平成24年7月31日(火)

会場：豊橋創造大学 A32 教室 A22

参加人数：学生 56名、教職員 6名

講師：キャラメルソース(株)取締役 谷口 優 様

＜キャリアプランニング科2年生＞

開催日：平成24年7月31日(火)

会場：豊橋創造大学 A22 教室

参加人数：学生 26名、教職員 4名

講師：キャラメルソース(株)代表取締役 初見 康行 様

2. アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施

今回の事業は、全学総力をあげて、学生の「社会人基礎力・就業力育成」支援に臨むことが基本姿勢であり、2番目の取り組みではキャリアセンター、教員、教務課の職員が協働して実施している。

学生をキャリアデザインに取り組ませる際、自己理解をどう深めさせていくかは大きな課題である。「自己理解」は、学生が志望会社を選び、志望動機を語り、自分の長所・短所を見つめることができるようになるためにはどうしても取り組まなければならない分野である。

一連の「就職ガイダンス」を実施する中で面接訓練を行う機会があるが、アクティブラーニングの手法を用いて学生に自己理解を深める経験をさせた。チーム分けを行い、グループワークの形式で、テーマを与えてディスカッションさせ、チームごとにプレゼンテーションをさせた。振り返りシートを用意して、ステップごとに自分の現状を認識させた。自分が採用担当者の役を演じるロールプレイでは、また違った視点から同級生の姿に自分を重ねて見ることにもなり、新鮮な経験だったようで、今後の実際の面接に臨むための準備としては有意義なものであった。

例年、面接訓練のイメージとして人前で話す場面を思い浮かべ参加をいやがる学生が欠席することがあったが「メンタルタフネス育成講座」の成果のためか、学生の多数が参加してくれた。参加したら参

加したで楽しむすべを身につけてきたようで、グループの学生と新たな出会いを経験したり不安を共有したり、偶然与えられたチャンスを活用する力も本人が自覚しない内についてきている気がしている。

「自己理解促進講座」の効果の把握については、ルーブリック評価指標を設定した。その評価結果をもとに評価指標の改善を進めている。

この講座のあとで、学内企業展、豊橋商工会議所主催の企業説明会、「女子学生のための就職フェア」などへの参加を促した。これらの企業セミナーでは、各ブースで入社数年の若手社員が自分の会社を熱く語っている場合がある。自分の会社はどんなことをしているのか、その会社で自分はどんな仕事をしているのか、どんな後輩を欲しいと考えているのか、会社の魅力や働くことの意義を先輩として語っている。模擬面接を経験した学生達は、傍で見ていると社会人の迫りに圧倒されるとともに、自分の将来の姿を彼らに重ね、自分もそんな社会人になるんだという思いで臨んでいるようにも見えてくる。生真面目にメモを一生懸命とっている学生達をみると、もっと型破りな学生がいてもいいような、ある意味欲張りな矛盾した気持ちも頭をよぎる。

この学生達には、今後、教職員が個別に面接訓練に対応することになっている。

《主な行事》

(1) 自己理解促進講座

開催日：平成25年2月4日(月)・5日(火)

会場：豊橋創造大学 A32 教室

参加人数：キャリアプランニング科1年生 69名

講師：(株)学研メディコン 宗村 義隆 様

(2) PROG 受験

開催日：平成25年2月22日(木)

会場：豊橋創造大学 A24 教室

参加人数：キャリアプランニング科1年生 66名

3. 地域組織と連携した「プロジェクト活動」

「特別研究セミナー」という科目を使い、PBLと称されるプロジェクト活動を実施した。地域社会と連携した活動を展開するということで、4月初旬に「豊橋を知る」というキックオフ講演会を開催した。この取り組みは学生たちが地域社会・企業と関わりを持つ場を用意し、プロジェクト運営を通じて、学生自らが主体的に学べる機会とするものである。平成24年度は8つの多様なプロジェクトを実施することができた。

今回の取り組みでは、伸ばすべき資質については、経済産業省の「社会人基礎力」の要素の中から「主体性」「計画力」「傾聴力」「ストレスコントロール力」を評価の中心に据えて、達成度評価を実施することにした。プロジェクト活動は学生にとって自由度の大きい活動であり、これらの分野の力の成長度合いは比較的測定しやすいと考えたからである。「社会人基礎力」の12の要素を4つに絞り込んだ形になっているが、それぞれの力を広がりのあるものと捉えているので、積極的に対象としていない分野の力も同時に伸びてくるものだと信じている。

「主体性」は、当事者意識、やる気といった言葉でも表わされるもので物事に取り組む姿勢である。

「計画力」を強調することにより、プロセスを大切にす姿勢を強調した。学生はとかく結果ばかりを

見てしまい、それまでの途中の段階を考えプロセスにより自分を鍛えるということをしたがらない。プロセスを楽しむことによって自ずと次の段階が見えてくることも教えるように努めた。

「傾聴力」については、ただ相手の話に耳を傾けるということではなく、相手の話を冷静に捉え、自分の考え方を自分の言葉で返して、アイデアのキャッチボールをすることが当然考慮されている。

「ストレスコントロール力」については、1 番目の「メンタルタフネス育成講座」で採り上げており、プロジェクト活動を通して、その意義について身に染みて感じてもらえたはずである。

「プロジェクト活動」の効果の把握についても、ルーブリック評価指標を設定しアンケートを実施したが、定量的な測定が困難なことを実感させられた。現在、結果をもとに評価指標の改善を進めている。数値的な評価とは別に、「プロジェクト活動の経験がこれまでの学校生活の内が一番楽しかった」という学生のひと言で、現場の教員はいろいろな努力が報われた感じがし、次のプロジェクトへのやりがいとなっているのもまた事実である。

プロジェクト活動を支援する教員は、アクティブラーニングの手法を活用するように努めたが、今年度は部分的な取り組みに終わった。平成 25 年度は教員でアクティブラーニングの勉強会を持つ予定である。

《主な行事》

(1) 「豊橋を知る」キックオフ講演会

開催日：平成 24 年 4 月 24 日（火）

会場：豊橋創造大学 A23 教室

参加人数：情報ビジネス学部 3 年生 42 名

キャリアプランニング科 2 年生 55 名

教職員 31 名

講師：豊橋市企画部政策企画課 主査 増田 明 様

(2) プロジェクト活動成果発表会

開催日：平成 24 年 12 月 19 日（水）

会場：豊橋創造大学 A21 教室

参加人数：キャリアプランニング科 2 年生 76 名

来賓 5 名

教職員 12 名

来賓：愛知県豊橋警察署 生活安全課 課長 大崎 逸朗 様

生活安全課 生活安全係主任 齊藤 晃一 様

豊橋市福祉部 こども未来館 加藤 雄規 様

(株)東京庵 豊川店 店長 戸倉 信一郎 様

ワタナベローズナーセリ 代表 渡辺 真臣 様

4. 「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有

本科の教育改革の参考とするため、平成 24 年度に地元を代表する企業・金融機関・病院を訪問し、卒業生に対するニーズ調査を実施した。改革に向けての示唆は、一言に集約すれば、学生の「人間とし

ての魅力」をどう磨くかということであった。産業界が求めるものは、コミュニケーション能力や、物事に取り組む姿勢、やる気など、まさに「社会人基礎力」に代表される資質であることを確認できた。

世間に公表されているどのアンケート結果でも、産業界が求める能力は、「コミュニケーション能力」が圧倒的にトップである。

コミュニケーション能力というと、討論や発表、文章作成などのスキルを問題にしているように思われがちだが、そんなに狭い分野だけの力を問題にしているわけではないと思われる。論理的な思考無しには、討論や発表で相手を説得できるものではないからである。何よりコミュニケーションは双方向である。相手に自分の考えをわかりやすく伝える発信力や説得力も重要だが、いま話題になっている、相手の意見を丁寧に聴く傾聴力や、意見や立場の違いを受け入れる柔軟性や臨機応変な対応ができなければ他者とのコミュニケーションは成立しない。会社組織のような集団で円滑に行動していくには、自分と周囲との状況を把握する状況把握力も必要となる。まとめると、企業が「コミュニケーション能力」と称しているものは、ビジネス文書作成、討論、発表などのスキルに加え、論理的思考力、説得力、発信力、傾聴力、柔軟性、臨機応変な対応、状況判断力も含めた総合的な力を指しているのであり、実社会が求めているのは、そのような能力を備えた人材なのである。このような多様な能力を育成してほしいという要求に対応するため、カリキュラムマップを作成しつつあるが実効性あるものにはなっていない。

このような汎用能力を培う手段としてアクティブラーニング（能動参加型授業）が話題になっているのである。

今回の取り組みではアクティブラーニングの具体的手法として5つの要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を挙げ、教育現場のあらゆる機会を活用して、学生の社会人基礎力を伸ばすようにした。

フィールドワークというと「インターンシップの活用」がすぐにも頭に浮かび、本学でもかなり前から実施しているが、文化系の分野では相手の都合もあることであり、その内容を深化させることに困難さを感じてきた。

「ファシリテータ」という言葉があるが、学生を巻き込んでいける教員の育成が課題である。

学生がどう成長するか、どれだけ成長するかは、もちろん学生次第の面が大きいことは事実であるが、教員側としては、自分の成長を含め、重要視すべきことは明らかである。挑戦すべき目標、その目標を達成するための具体的道筋、その目標を実現させようとする情熱があれば人は成長していく。この基本姿勢を念頭に平成25年度も教育手法を改善していきたい。

アクティブラーニングも、その言葉自体の広がりとともに、内容自体の深化も求められている。「課題発見・解決能力」を身につけさせる必要性は痛いほどわかっているつもりである。

以上4つの取り組みをまとめたが、常に念頭に置いていることは次の3点である。

- (1) 学生に成功体験、達成感を味あわせたい。
- (2) 学生に個性を磨く経験をさせたい。
- (3) 学生に、ちょっぴり背伸びをさせるような経験をさせたい。

3. 2 教育体制・産業界ニーズ 把握体制の整備・連携推進

3. 2 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備・連携推進

教育体制整備については、全学をあげての組織「あり方検討委員会」を立ち上げ、カリキュラムの大枠から詳細な開講科目に至るまで詳細に検討した。

その結果に基づき、平成26年度からカリキュラム改訂を実施する予定である。

カリキュラム検討の際には、地元の有力企業・組織を訪問し、本学の卒業生に対するニーズについてヒアリングを実施し、その結果をカリキュラム改訂に反映させた。

産業ニーズを把握するやり方は、例年5月以降に、本学卒業生を採用してくれた企業をキャリアセンター教職員が訪問し、卒業生の状況を聞くようにしている。この訪問結果を、本学の社会人基礎力養成に活かす仕組みを強化しつつある。

●平成24年度の他大学との連携活動

中部圏申請事業の採択以降の活動である。毎月1回のチーム会議開催を定例としてきた。

- 10月26日 第1回東海Aチーム（教育力強化）会議
- 11月17日 中部地域大学グループ全体会議（全体の取組方針、意見交換）
第2回東海Aチーム（教育力強化）会議（チームとしての達成目標と評価基準）
- 12月7日 第3回東海Aチーム（教育力強化）会議（連携FDの計画）
- 1月17日 第4回東海Aチーム（教育力強化）会議（各大学の取組紹介、意見交換）
- 2月8日 東海Aチーム連携FD「アクティブラーニングを活用した教育力の強化」
- 2月9日 東海Bチーム連携FDの参観
- 2月19日 中部圏産学連携会議（産業界との対話、各大学取組紹介、分科会）

3. 3 教育体制・産業界ニーズ 把握体制の後方支援

(1) ユビキタスキャンパスグループ活動報告

1. グループ事業の取組

本グループでは、教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援を目的として、ICT 利活用環境の整備および推進のための以下の活動を行っている。

- (1) 学内 ICT 環境の整備・充実（設備等の維持や利便性向上の検討）
- (2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、eラーニング推進
- (3) 「4つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援
- (4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

平成 24 年度は、平成 23 年度の事業（「大学生の就業力 育成支援事業」『持続型職業人 SOZO プロジェクト』）の実施結果と課題、および、学生アンケート等の評価結果を踏まえ、改善活動を中心に上記事業を展開した。活動内容の一覧を表 1 に示す。

表 1 平成 24 年度ユビキタスキャンパスグループ活動一覧

日付	分類	内容	対象
4月12日(木) 4月17日(火)	(2)	プロジェクト管理アプリ導入説明会	情ビ3年
4月18日(水)	(2)	プロジェクト管理アプリ導入説明会	キャリ2年
5月22日(火)	(4)	Webサイト再構築・公開	
6月7日(木)	(2)	就業力育成支援を目的とした一問一答アプリ・システム Sozo Platz 開発・公開 (v1.0.0)	
6月13日(水)	(2)	iPad 配布・説明会	経営1年
6月26日(火)	(2)	アプリ導入説明会 (Handbook, Sozo Platz)	経営1年
7月18日(水)	(2)	アプリ導入説明会 (Sozo Platz)	教員
7月30日(月)	(2)	アプリ導入説明会 (Sozo Platz)	情ビ3年
7月31日(火)	(2)	アプリ導入説明会 (Sozo Platz)	キャリ2年
8月2日(木)	(2)	Sozo Platz 機能改善 (v1.0.0 → v1.1.0)	
9月11日(火)	(2)	iPad 配布・説明会	情ビ2年
9月12日(水)	(2)	iPad 配布・説明会、アプリ導入説明会	キャリ1年
9月12日(木)	(2)	Sozo Platz 機能改善 (v1.1.0 → v1.2.0)	
9月20日(木)	(2)	アプリ導入説明会 (Handbook, Sozo Platz)	情ビ2年
9月24日(月)	(2)	Sozo Platz に関する発表・意見収集 (電気関係学会東海 支部連合大会)	
12月28日(金)	(1)	eラーニングサーバ環境改善 (ハードウェア増強)	
3月29日(金)	(3)	プロジェクト管理アプリ・システム機能修正	
3月29日(金)	(3)	スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) プロトタイプ開発	

情ビ：情報ビジネス学部キャリアデザイン学科，経営：経営学部経営学科

キャリ：短期大学部キャリアプランニング科

2. 活動成果

(1) 学内 ICT 環境の整備・充実（設備等の維持や利便性向上の検討）

- 平成 23 年度末に無線 LAN 環境の充実化をはじめとする学内 ICT 環境の更新を行い、大学の一般教室・PC 教室のすべてにおいて携帯情報端末（iPad）から無線 LAN 接続ができる環境を整備した。平成 24 年度は、更新後の学内設備に対してシステムログ等の観察を通じて不具合発生状況を監視した。結果として、特に不具合の発生は確認されず、現状では安定した ICT 環境を提供できているといえる。
- D 棟 5 階共同ゼミ室に iPad を接続・管理できる PC 環境を追加整備し、学生の iPad 利用に関する利便性向上を図った。
- e ラーニングシステム（Handbook）の利用者増加に対応するため、該当サーバのハードウェア増強を行い利用環境の改善を行った。

(2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、e ラーニング推進

- 平成 23 年度は、プロジェクト活動に参加する学年の学生（情報ビジネス学部キャリアデザイン学科 3 年、短期大学部キャリアプランニング科 2 年）に iPad を貸与し、プロジェクト活動や e ラーニングに利用させた。しかし、iPad を持つ学年と持たない学年が混在したため、教員が授業等において積極的に iPad を活用できない状況であった。この問題に対し、平成 24 年度は、事業対象の学部・短期大学部の学生全員に iPad を貸与し、授業等での利活用を阻害する要因を排除した。
- iPad 貸与学生を対象に、iPad の基本操作、プロジェクト管理システム、および、e ラーニングシステム（Handbook、Sozo Platz）に関する説明会を実施した。



図 1 iPad アプリケーション導入説明会

- 教員に対して e ラーニングシステム（Handbook）利用ガイドを配布し、e ラーニングシステムの利活用を働きかけた。全学生に iPad を貸与した効果もあり、平成 24 年度秋学期以降は授業・演習での Handbook 活用が進んだ。結果として、全コンテンツ数：38、システムへの総年間ログイン数：5,288 と前年から飛躍的に増加した。
- 前年度に試作開発した就業力育成支援を目的とする一問一答アプリ（Sozo Platz）の正式公開、および、機能改善を行った。また、その導入方法や利用方法について、

学生と教員を対象にそれぞれ説明会を実施した。開発したアプリに関して学会発表（平成 24 年度電気関係学会東海支部連合大会）を行い、外部の教育者の意見収集を行った。

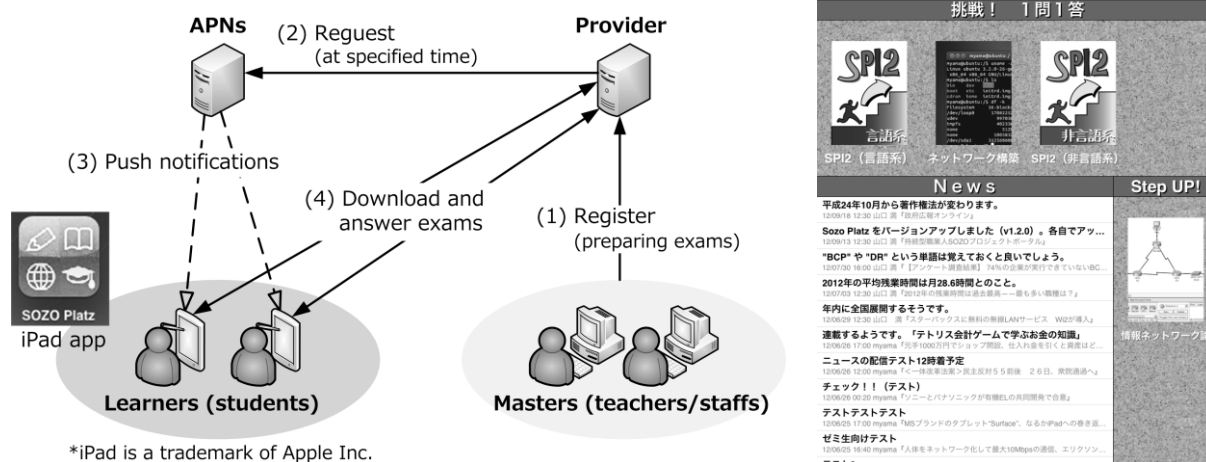


図 2 一問一答アプリ (Sozo Platz)

(3) 「4つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援

- 自己理解促進プログラムグループ、および、地域産業連携プロジェクトグループと連携し、それぞれのグループで使用する『スチューデントプロフィールシステム』（学修ポートフォリオシステム、Sozo Passport）の仕様策定を行い、システムの開発に取り組んだ。このシステムは、PROG アセスメント結果や社会人基礎力評価シート、その他制作物をアーカイブするシステムで、学生はいつでも自分の活動等について振り返ることができるようにしている。現在はプロトタイプが完成した段階であるため、平成 25 年度前半も継続して開発およびテストを行い、平成 25 年度秋学期から正式に運用を開始できるよう計画・準備する。
- 地域産業連携プロジェクトグループで利用する『プロジェクト管理システム』について、同グループと連携し、利便性を向上させるための問題点の洗い出しと具体的なシステム不具合に関する機能改善を行った。

(4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

- 平成 23 年度までに利用していた学内 Web サイト（内部関係者向け）について、事業成果を対外的に公開できるよう再構築を行った。また、学内向け（制限付き）のページを作成してマニュアル等の資料や FAQ 等の掲示を行い、学生・教職員向けの支援サービスを充実させた。

サイト URL: <http://project.sozo.ac.jp/>

3. 実施事業を踏まえた次年度の方策

(1) 継続して学内 ICT 環境の維持および改善活動を実施する。特に、学内ネットワークに接続する無線端末の増加に伴うインターネットトラフィックの増加に対応するため、対外接続回線の見直しを行い帯域確保に努める。

(2) 新たに本学に入学する学生に対しても同様に iPad を貸与し、全員が iPad を所持し学習に利用できるよう準備する。また、そのための説明会等を随時実施する。

(3) 平成 24 年度までに完成したスチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) のプロトタイプに対する試験や評価を通じて改善を春学期中に行い、秋学期から学生・教員で利用できるよう関係事業グループと連携して開発・準備を行う。また、プロジェクト管理システムについても利用教員から意見を収集して機能改善を行い、より学生指導に有益なシステムに進化させる。

(4) 前年度に引き続き本事業の活動内容を Web サイトに整理して掲載し、連携大学向け情報共有および一般の学外向け情報発信を行う。

(2)大学コミュニティグループ

1. グループ事業の取り組み

大学コミュニティグループ活動は、『産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業』の補助金対象外で、費用は本学負担で行っているものである。目的は『教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援』としている。平成24年度は卒業後3年間における卒業生の離職状況調査を中心に以下の活動を行った。また、この活動は大学と短大が連携した形で行っている。

平成24年度活動内容

月 日	活 動 内 容	短大
4月～5月	平成21、22、23年3月卒業生 就業状況調査の集計、分析	○
5月	就業状況調査未回答者追跡調査実施	○
6月～3月	卒業生就職先に企業訪問 求人開拓 在学生への教育指導依頼	○
10/27-10/28	創造祭同窓会ブース開設 創造祭へ来た卒業生にアンケート調査を実施	
10/29 (月)	学内企業説明会 OB人事担当者参加による説明に実施	
11/29 (木)	短大OG交流実施 (先輩の就職体験報告会にOG参加)	○
2月	平成22、23、24年3月卒業生 就業状況調査の実施	○
2/9 (土)	学内企業説明会 OB人事担当者参加による説明の実施	○
3月	就業状況調査未回答者追跡調査実施	○

2. 活動成果

■ 卒業生就業状況調査

本学では、過去3年間の卒業生に対して、就業状況を把握するアンケートを毎年実施している。アンケートは離職率を集計するだけでなく、離職に至った理由等を詳細に分析し、在学生の就職指導や各種対策講座へも反映し、安易な離職を防ぐためのノウハウ等の構築に役立っている。

また、このアンケートでは卒業生との大学コミュニティを活用した社会人基礎教育を展開させ、在学生が交流できる仕組み作りに役立てることを視野に入れた項目も設けており、卒業後の早期離職を防ぐことに繋げている。

尚、アンケートの回収率は伸びず、②平成25年3月31日については、未回答の卒業生宅へ休日に電話を掛けて、個別に調査を行っているところである。

《卒業生の就業に関する追跡調査》 ①

対象：2008～2010年度卒業生 182名 (大学卒業生：95名 短大卒業生：87名)

実施期間：平成24年4月20日～平成24年5月11日

《卒業生の就業に関するアンケート》 ②

対象：2009～2011年度卒業生 283名 (大学卒業生：123名 短大卒業生：158名)

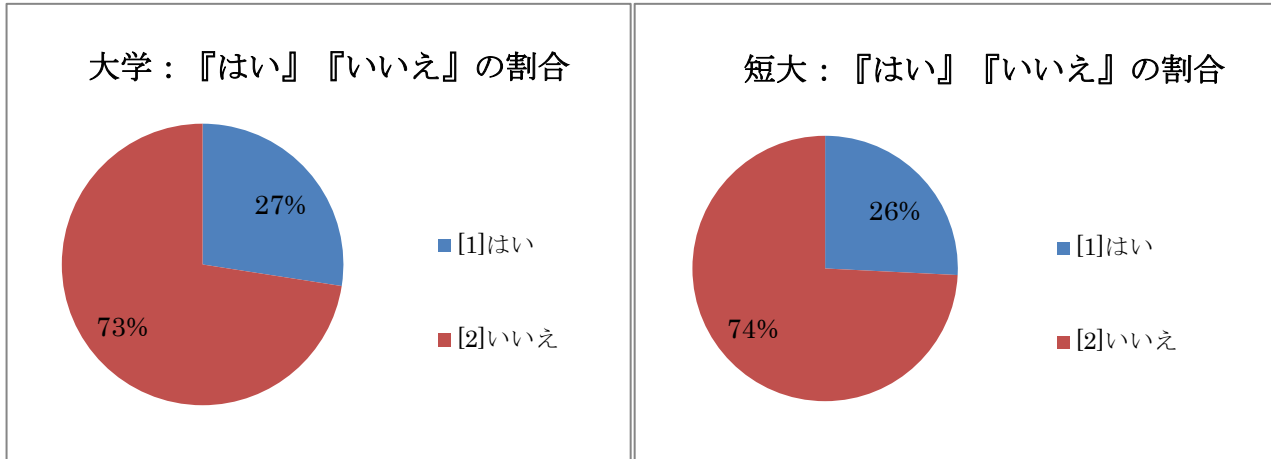
実施期間：平成25年2月1日～平成25年3月31日 集計中

卒業生の就業に関する追跡調査 ①集計結果

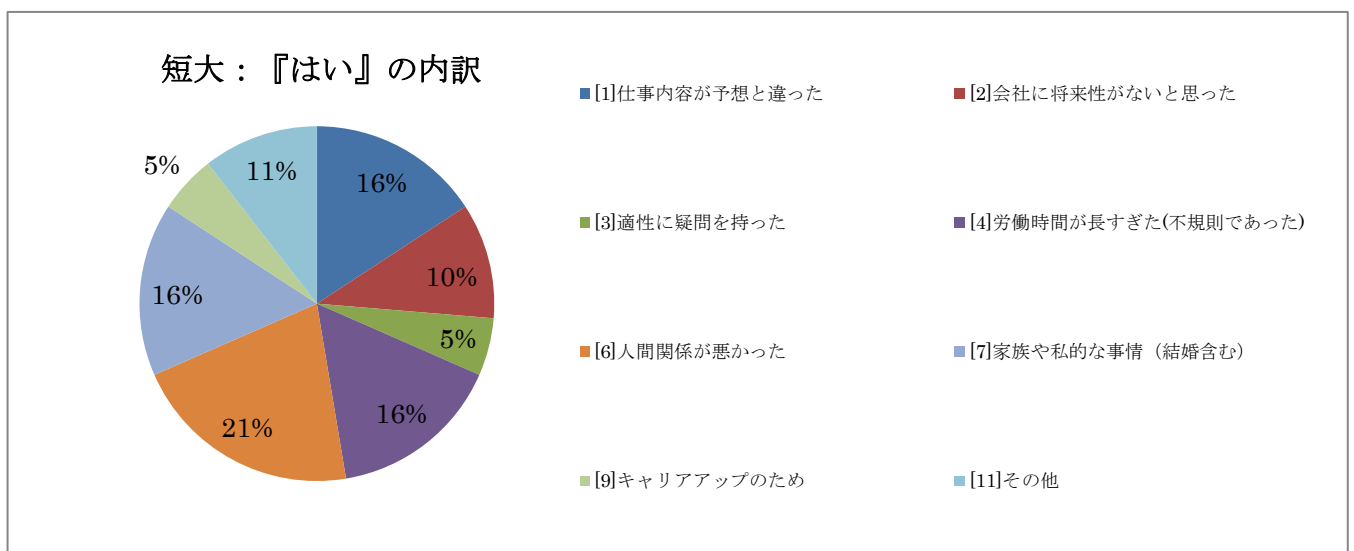
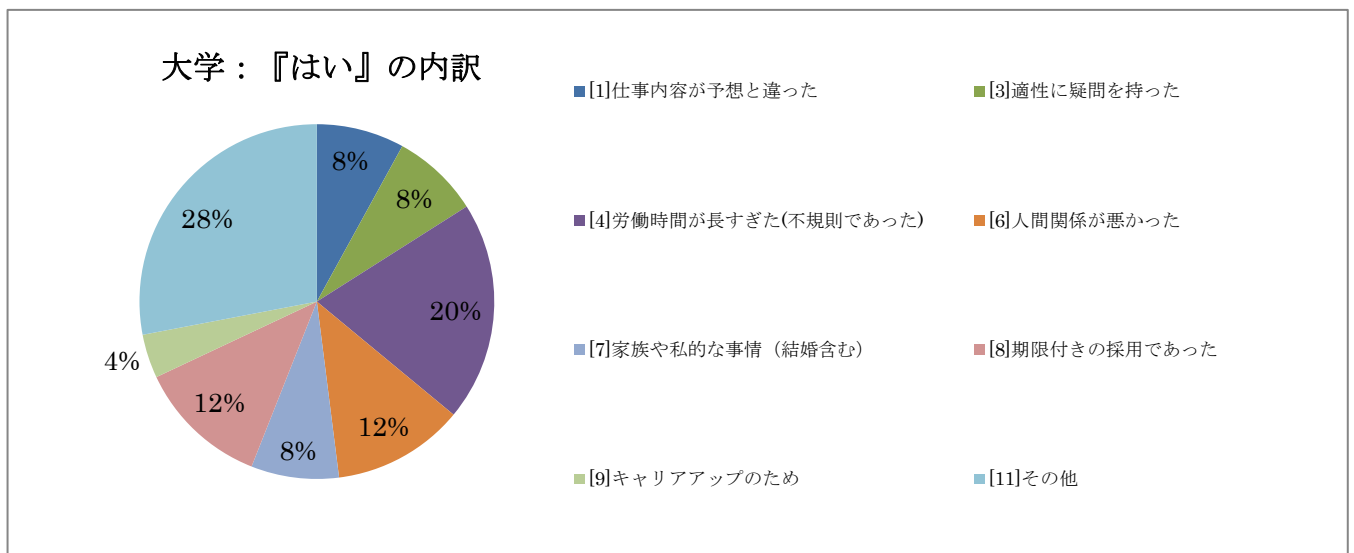
対象：2008～2010年度卒業生（大学卒業生：95名 短大卒業生：87名）

実施期間：平成24年4月20日～平成24年5月11日

Q1. 大学卒業後、離職または転職をされましたか？



Q2. 大学卒業後、離職または転職をされましたか？『はい』の第1理由



離職率については、大学・短大とも概ね2割から3割ということで、平均的な数値といえる。辞めた理由は、大学卒業生では『労働時間が長すぎた（不規則であった）』、『人間関係が悪かった』、短大卒業生では『人間関係が悪かった』『労働時間が長すぎた（不規則であった）』、『仕事内容が予想と違った』というところが多く、人間関係、労働時間がポイントとなっているように考えられる。どんな仕事でも3年間は我慢して従事しないと仕事の本当の面白さ、充実感、達成感は味わえないと言われているが、早期に離職してしまうことは、本人にも企業にもデメリットであると考えられる。

これから就職超氷河期、景気の低迷からは脱していく気配の日本経済ではあるが、早期離職防止に向けて本学の教育改善につなげていくためにも本調査は継続していく。

■ 短大先輩の就職体験報告会（キャリアプランニング科）

キャリアプランニング科1年生（63名参加）を対象に就職支援講座として「先輩の就職体験報告会」を実施した。内定を獲得した2年生先輩5名と短大を卒業したOG1名をお招きした。はじめに2年生の先輩5名より、「就職活動はいつ頃から、どんなことを始めたか」「自己分析が大切だと思ったことは？」「エントリーシートや履歴書作成で注意したこと」など話があり、「あきらめずに頑張ることが大切だと思うので、つらくても頑張ってください」と後輩たちに激励を送った。続いてキャリアプランニング科を卒業して3年目の先輩より、実際に社会に出て気づいたことや大変だったことなど貴重なお話をいただいた。OGによる体験談はこれから就職活動を行う学生たちに実社会での経験を伝える貴重な機会となるので、今後もOGの参加枠を広げてこのような報告会を実施してゆきたい。



■ 学内企業説明会 OB 人事担当者参加による説明

34 社が参加した秋の学内企業説明会（10 月 29 日開催）、春の『三河地区企業学内研究セミナー』（2 月 9 日）それぞれ、3 人の本学 OB 人事担当者が参加した。本学学生の目線に立った、現実的で身近な説明は大変親近感もあり学生自身に大変意義のあるものであった。これからは卒業生が在籍する参加企業数を増やしていくことが重要である。



秋の学内企業説明会



OB の人事担当者

《2 月 9 日参加企業に実施した GP アンケートより》

- ・『産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業』の取り組みについては大変よい取り組みである、特にメンタル面での取り組みは先進的だと思う。
- ・学生さんが自ら立ち上げ運営までされることは、とてもよい学習になると思います。
- ・大学の講義を聞くだけでは学べないことを肌で感じられるよい機会である。
- ・最近の学生に不足している点は、個性、コミュニケーション能力、積極性、忍耐強さ等。
- ・面倒見がよい学校が多いですが、ある程度「不自由さ」を経験することで、自ら動き発見する力が養われるのではないかと考えます。わざわざ大人が手助けしなくても社会を堂々と渡り歩いて行ける強さを身に着けられるような教育をお願いしたいです。

■ 企業訪問

企業訪問は、57 社（学部 23 社・短大 34 社）行った。特に短大では、昨年度卒業生が就職した企業を中心に訪問を実施し、採用した側の思惑や意見・配慮等を詳細な部分まで聴取することができた。また、訪問することにより卒業生が喜ぶ様子から状況を読み取り、また苦悩する表情に励ましの助言を行うこともできた。このことは、早期離職に至る防波堤となったことと言える。さらに卒業生に対するフォローアップ効果も大であった。

今後は、直前卒業生の就職先訪問に留まらず、過去・新規の就職先企業訪問に広げていきたい。

3. 次年度に向けた改善

本活動は『教育体制・産業界ニーズ把握体制』の後方支援を行っているが、次年度は、メンタルタフネス講座受講生が対象の卒業生就業状況調査の集計が発表となる。結果を分析して教育改善を行うため学部、短大にフィードバックしていきたい。また、創造祭を利用した同窓会 OB ブースで参加を促し、交流人数を充実させ、さらなる OB、OG の協力を得ながら、様々な企画を実施していきたい。企業訪問については、卒業生の就業状況、情報収集先としても 80 社以上を目標としてゆく。

4. 補助資料

① プロジェクト演習成果報告書（教員）

教員氏名	プロジェクトテーマ	掲載ページ
朝倉由美子	食の伝達「大学生コックさんのクッキング教室(子どもクッキング)」プロジェクト	41
今泉仁志	豊橋の朝市を考えるプロジェクト	45
木下賀律子	「発酵食品のおいしさ発見」プロジェクト	49
千賀博巳 中島剛 細谷邦夫	防犯プロジェクト	53
寺本和子	身近な自然発見・発信プロジェクト 2012	57
花岡幹明	豊橋うどんプロジェクト	59
村松史子	We ♥ ROSE プロジェクト	63

<p>プロジェクトの活動内容</p>	<p>4/11 ゼミ長選出。こどもクッキング実施可能日(4回)の選定。 18 班分け、担当責任者選出。 1~4回目のテーマと献立の話し合い。 季節を考えながら、時期の野菜を出来るだけ組み込んだ献立にする。 1回目 6/23 豆腐ハンバーグ・おから入りポテトサラダ・キャロットゼリー 2回目 9/29 混ぜご飯・汁物・冷果 3回目 12/8 クリスマスの雰囲気料理と、ケーキ 4回目 2/2 ポトフ・焼き菓子</p> <p>4/25 試作メニュー案作成(素案)</p> <p>5/1 ココニコに挨拶とキッチンの下見に行った。 /9 試作(豆腐ハンバーグ・おから入りポテトサラダ) /16 試作(キャロットゼリー) 試作を基にレシピ・タイムテーブル作成に入る</p> <p>6/12 試作(豆腐ハンバーグ、サラダ)2回目 修正点の確認 /19 持ち帰りレシピ・発注票・アンケート・タイムテーブル完成の確認 /22(金) 材料の準備・持参品の確認・タイムテーブルの最終打合せ /23(土) 第1回目こどもクッキング開催(参加者 20名) /26 反省会、感想文提出、アンケート集計、2回目(9月)の献立決定 4回目の取り消しの動議が出て、取りやめの方向へ意見まとまる。 当初の混ぜご飯を要望の多いギョウザに変更。他のメニューも組みなおし、 粟米湯(とうもろこしスープ)と豆乳のプリンまたはパンナコッタの案が出された。</p> <p>7/3 メニュー案を持ち寄り担当に分かれて検討作成 /10 試作(プリン2種)比較して南瓜豆乳プリン選出。 /17 試作(スープ) 試作から変更点の確認 レシピの修正へ</p> <p>夏期休業</p> <p>9/19 試作(ギョウザ) /26 持ち帰りレシピ・発注票・アンケート・タイムテーブル完成の確認 /28 材料の準備・持参品の確認・タイムテーブルの最終打合せ /29 第2回目こどもクッキング実施(参加者 11名)</p> <p>10/3 反省会、感想文提出、アンケート集計、3回目(12月)の献立決定 /10 第3回目のレシピ素案提出 クリスマス月であり、パーティーのムードを想定して、要望多かったもう一つの メニューのピザと4回目に予定したポトフを加えて考えることとした。 デザートにはケーキを作りたいとの意見があり、いくつか候補を挙げることに した。 /30 試作(ピザ)、プロジェクト報告関連の担当者を選出</p> <p>11/7 試作(ポトフ・ミルクレープ)、プロジェクト報告会のPPT資料作りの打合せ /14 試作(ピザ)2回目 最終確認 /21 通してのリハーサル 最終確認 /28 報告会に関する打合せ</p> <p>12/5 持ち帰りレシピ・発注票・アンケート・タイムテーブル完成の確認 /7 材料の準備・持参品の確認・タイムテーブルの最終打合せ /8 第3回目のこどもクッキング実施(参加者 21名) /12 反省会、感想文提出、アンケート集計、報告会資料仕上げへ /19 プロジェクト報告会にて発表(鈴木・石倉)</p>
--------------------	---

うまかったこと (成功事例)	<p>① 参加者の評価:小学生 3～6年生対象だが、最終回は3年生の参加も多かった。アンケート結果は毎回「楽しかった」「おいしかった」「学生の指導はよく分かった」「次も参加したい」等、学生の励みとなる評価をいただいた。</p> <p>② 学生は、初回は緊張して動きがぎこちなく、コミュニケーションも上手くできず、連携ミス等も生じたが、回を重ねるうちに要領がつかめてきた。料理が好きでココニコのキッチンにも慣れた子どもたちもおり、その子どもたちの協力にも助けられたことも多かった。だんだん打ち解けて、声掛けや会話も増えて、笑顔で指導することができるようになった。最終回を終えたときの学生の感想の多くは初めとは随分変わり、「楽しく終えることが出来た。よい経験が出来た。」と述べていた。</p>
計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)	<p>① 年度初めの打ち合わせでは年間 4 回の実施を予定し、ココニコの空き状況から 4 回目は1月の秋学期試験後の2月2日になってしまった。当初は学生も楽しみにして献立作りに意欲的だったが、1 回目を終了した後に大変だという印象が強かったのか、6月のゼミの中で秋学期試験が終わった後までセミナー活動(こどもクッキング)はしたくないという意見が出された。子どもたちもココニコのスタッフも楽しみにしていることを強調したが、皆の意見が取りやめの方へまとまり、キャンセルをすることとなった。ココニコには大変申し訳ないことをした。</p> <p>② ゼミではもう一つのプロジェクトで豊橋動物園の小象マラーに関連した焼き菓子開発の試作も並行して進めていたが、試作がイメージ通りに進まなかったり、製品販売となると調べたりすることも増えそうで、メニューや製造と販売方法など一連の開発への意欲が湧かないということで、肉体的にも精神的にも負担になって行ったようだ。そこへ、こどもクッキングが忙しくなり、両方は負担であると動議が出され、6月末くらいで焼き菓子開発は中止した。</p> <p>H23年度の学生が2つのプロジェクトを実施出来ても、次の年度も同じではないことを認識して、実施できるかよく話し合う必要がある。調理師の学生はいくつものプロジェクトを進めており、時間的余裕のない中であろうと察して、当ゼミは活動を1つに絞った。</p> <p>③ 司会進行やレシピ作成も学生主体に人選をしたので、得意なものを選択したところがあり、伸ばしたい学生に当てることが出来なかった。</p> <p>コミュニケーション力やPC力、計算力も早めに担当を割り振り、時間をかけさせてでも関わらせたほうがよかったのかもしれないと反省した。</p>
学生の自己評価アンケート 結果を見ての感想・意見 プロジェクト活動の総括	<p>「主体性」:「やってみてよかったと思う」7名、「やるべきことはやった」2名 「計画力」:「計画以上」2名、「遅れたがやるべきことはやった」6名、「なかなかうまくいかなかった」1名 「傾聴力」:「よりよい活動になりようにした」3名、「普段話さない人とも～」2名、「親しい人とは～」4名 「メンタルコントロール」:「皆で楽しくやれた」3名、「協力して～」4名、「仕方なくやった」2名 「感想・意見」:「小学生に教えるのは予想以上に難しかったが、本当にやってよかった。」と実施したことを評価している。</p> <p>手順をやっと覚えた程度のメニューを見知らぬ子どもたちに対して、指導する立場で臨むことは、「子どもと話すのは苦手なんだけど・・・」「失敗したら・・・」「ちゃんと伝えられるか・・・」「想定外の事が起きたら・・・」といろいろな不安がいっぱいだったと思う。しかし、純粋な子どもたちが笑顔で近づいてくれて、助けてくれたことも学生達の緊張をほぐしてくれた。中には無口な子どもも居たが、次は学生から声がけられるようになって</p>

	<p>た。何事も初めは不安でも取り組んでみる前向きの姿勢で臨めば大きな実りをもたらせてくれることが分かったようだ。この経験を卒業後も社会の中で新しい仕事の困難に遭遇した時に思い出し活かして前向きに取り組んでくれることを期待する。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>様々な場面に気を配るように課したこと</p> <p>① けがの想定</p> <p>会場の実習台は小柄な小学生には少し高く、中が見えにくいいため、過去に火傷をした参加者がいた。同じ事故を起こさないために、その状況の確認のために事前にココニコの調理台を見て、火傷の可能性がありそうな場面を確認し、万が一の事態に十分気を配るように念を押した。</p> <p>②参加者の満足度</p> <p>*参加者が出来るだけ均等に調理に参加できるように、状況を見ながら作業の分散や誘導をした。</p> <p>*コミュニケーションを絶やさず、楽しい雰囲気を出すように目配り気配りを課した。</p> <p>③任されたことはきちんと遂行する</p> <p>周囲への配慮が不十分で自己中心的だが、何かと発言をする学生と、意見に自信が無く、元気な仲間の目を気にしているのか、反対意見や提案等の発言ができず、静かにしている学生が混ざっている。しかし、静かな学生も自己評価では「やってよかった。楽しかった。よい経験だった。」と書き残している。</p> <p>活動的な学生の前では何も言えないため、学生だけに決めさせるとはじき出されそうだが、単数で話をすると意見や要望が出てきて、自分の意見は言えると感じた。しかし、全体の話し合いではやっぱり言い出せない。そこでおとなしい学生の要望を教員からその学生に指名するような形で割り当てた。自分から申し出たことでもあるため一生懸命取り組み、笑顔も出た。自分から決めることへの責任を果たすまで、見守る根気が要るが、時間をかけてでもする必要がある。</p>
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の3つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3)メンタルコントロール力 傾聴力</p>	<p>(1) 主体性</p> <p>グループ活動であるため、検討会では黙ってられない性格の学生の意見に周囲が他の意見や提案をする。こういう誘引担当者は必要である。今回は学生の意見を受け入れる立ち位置で接したが、その方が自分たちで決めたという意識が強く全体的には主体性は高まったと感じる。ただ、活発だからと言って周囲の仲間にも頼っているだけで主体性があるとはいえない。周囲の状況に目と気持ちを向けられて、必要とあらば気が重くても自分で自分の背中を押せる力をつけさせたい。</p> <p>(2) 計画力</p> <p>主体性に関連するが、個々に責任を持たせ、出来るだけ細かな計画を立て試行を重ねて、どうすればよいか常に考えさせることで自信をつけさせることができる。</p> <p>(3) 傾聴力</p> <p>自身がつけば、ゆとりが出来て傾聴力も備わってくる。その伸び方には個人差がある。主体性の備わった学生は冷静に周囲を見ることが出来るが、そういう学生は半分程度であった。</p> <p>(4)メンタルコントロール力</p> <p>「子どもが苦手」「知らない人に話しかけるのは苦手」など不安眼差しの学生も子どもと話さざるを得ない環境では積極的に話しかけて、流れも仕上がりも順調に進んでいた。腹を据える環境はメンタル面を強くすると確信できた。</p> <p>今後、教員はあくまでも学生に任せたという立ち位置であれども、軌道修正には気を配り、クレームや誘導をタイミングよく出せるように工夫することが要るであろう。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		今泉プロジェクト
テーマ		豊橋の朝市を考えるプロジェクト
組織	連携先	特に連絡はしていないが、「朝市」の広報をしているのは、 豊橋観光コンベンション協会 (豊橋商工会議所内) http://www.honokuni.or.jp/toyohashi/spot/000044.html
	指導教員	今泉 仁志
	メンバー	稲垣 汐里 谷本 紗希 山本 桃子 渡瀬 理恵 小倉 綾花 上田 瑛梨奈 合計 6名
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<p>豊橋では、大正時代から、昔ながらの路上売りが行われている。中心市街地の活性化とは別に、各町内には、朝市を介しての近所付き合いも続いている。学生の中には朝市に行ったことがない人もいたので、朝市というものを勉強してから、実際に朝市を見学してみる。</p> <p>●教育目的</p> <p>このプロジェクトを通して、どんなことでも、ものごとを進めていく上でプロジェクト的発想ができ、プロジェクトで使う手法が有効であることを教える。</p> <p>計画することの重要性を教える。</p> <p>全体を見通し、段階的に進めていく考え方を教える。タスクの考え方。</p> <p>PDCA サイクルを回すことを教える。どうやって改善するのか。</p> <p>リスク要因を考え、成功に導くことを教える。</p> <p>メンバー間でコミュニケーションをとる重要性を教える。</p>
プロジェクトの活動内容		<p>04 月 11 日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> このゼミで、プロジェクトを運営するということを説明した。 <p>04 月 18 日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクト管理アプリと Handbook を iPad にインストールした。 簡単な使い方を指導した。 <p>04 月 24 日(火曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> SOZO プロジェクトのキックオフ講演会に参加した。 「豊橋を知る」というテーマで、豊橋市の概要を学んだ。 <p>04 月 25 日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトで何をやるのか、皆でアイデアを練り始める。 昨年プロジェクトテーマを紹介した。 <p>05 月 02 日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトのアイデアを絞っていく。

	<p>05 月 09 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・プロジェクトのテーマを、「豊橋の朝市」を調べることに決定した。 <p>05 月 11 日 (金曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・プロジェクトの「実行計画書」を提出した。 <p>05 月 16 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・プロジェクト入門 <p>プロジェクトという考え方、プロジェクトマネジメントを説明する。 タスクについて解説する。PDCA サイクルを使ってやる改善を説明する。 リスク要因を前もって挙げて、成功の確率をあげることを教える。</p> <ul style="list-style-type: none">・プロジェクト実行の年間スケジュール表をわたす。 <p>大まかなスケジュールの説明。</p> <p>05 月 23 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・フランスの「マルシェ」について勉強した。 <p>05 月 30 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・教員が見学してきたマルシェの報告 <p>5/26(土)「花園マルシェ」、5/27(日)「まちなかマルシェ」</p> <ul style="list-style-type: none">・豊橋の朝市について勉強を始める。 <p>06 月 06 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・東日新聞の連載記事をもとに、豊橋の朝市の現状・問題点を研究した。 <p>06 年 13 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・豊橋の朝市を見学する日を決定した。→ 7 月 18 日 (水曜日)・浜松市から来ている学生がいるので、浜松の朝市に行くことも検討する。・朝市に行って調べてくることを考え始めた。 <p>06 月 20 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・朝市を訪問した際に使うチェックリスト(たたき台)を検討した。 <p>06 月 27 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・これまでやってきたことの振り返り。 <p>07 月 04 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・パーソナル・プロジェクト・マネジメントのすすめ <p>目的と締切があるものごとには、プロジェクトの手法が使えることを説明した。</p> <p>07 月 11 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・いよいよ朝市の見学が1週間後に迫ったので、詳細に検討した。 <p>07 月 18 日 (水曜日) (春学期最終授業日)</p> <ul style="list-style-type: none">・教員は、朝6時過ぎに、朝市の準備の様子を下見に行った。・朝9時前から10時15分まで、「三八の朝市」を全員で見学した。 <p>朝食を食べながら、お互いに感想を述べあった。</p> <ul style="list-style-type: none">・教員は、プロジェクトの中間報告書を書いた。 <p>11 月 14 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・朝市の感想文を書く。 <p>11 月 21 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・プロジェクト活動報告書(学生版)を完成させた。 <p>11 月 28 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・発表用パワーポイント原稿のチェック <p>12 月 12 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・発表練習 <p>12 月 19 日 (水曜日) プロジェクト成果発表会</p>
--	--

<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が、朝市というものを理解できた。 ・学生は、朝市の将来性について危惧しているようだ。 ・学外へ出て、いっしょに食事をしたりしたので、その点では楽しめたようだ。 ・見学した日が、カンカン照りだったので、お店を出す大変さがよくわかったと思う。 ・「朝市の現状を皆に伝えて、少しでも朝市に興味を持ってもらえればと思う」という感想があった。
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・路上で行われる朝市は天候に左右される。見学予定日の1週間前の天気予報では、曇り／雨であり、雨天が懸念されたが、見学の前日には「梅雨が明けたようだ」と発表され、当日はカンカン照りだった。朝9時といても、とても暑く、学生さん達は、露店を出している人たちの苦勞がよくわかったと思う。 ・ゼミのメンバー6名と教員の時間割を照らし合わせると、全員が空いている時間は、本来のゼミの時間(水曜日1限)以外は、月曜日と火曜日の1限の2コマだけであり、まことにプロジェクト活動がしづらかった。 ・浜松市から来ている学生達と、浜松の朝市に行くことを計画したが、日曜日開催のため、学生のバイトが急遽入ったりして実現できないままになった。 <p>●プロジェクト・マネジメント・システム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なかなか学生さん達には活用されなかった。 ・毎週水曜日の授業が終わると、その時間にやったことを議事録として、プロジェクト管理システムにアップした。タスクも更新し、追加していった。授業で使う資料は、前もって「ファイル一覧」フォルダに入れておき、授業では iPad を使って見るようにした。 <p>アップしてある資料は、</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) プロジェクト実行計画書 (2) プロジェクト年間計画(平成24年度)エクセル (3) タスクとは何か (4) フランスのマルシェ (5) 花園のマルシェ (6) まちなかマルシェ (7) 豊橋の朝市入門 (8) 今泉ゼミ集合写真 (9) 有機農業者の朝市での販売 PDF (10) 豊橋の朝市(東日新聞の記事) (11) 学生の授業時間割(春学期)エクセル (12) パーソナル・プロジェクト・マネジメント (13) 中間報告書 (14) 酉の市 (15) プロジェクト活動報告書(学生版) <p>「リンク一覧」にも、参考になるようなサイトを10ヵ所程度、登録してある。 チャットは、それほど活用されなかった。</p>

<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>想定していたよりは、高い評価をしている。自分のしてきたことを肯定したいためだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自分たちも朝市を出してみたらよかった」という楽観的な意見があった。 ・成果発表会での各チームの発表を見て、いろいろなプロジェクト活動の存在を知った学生もいた。各チームの途中経過を学生達に知らせることを考えてもよいと感じた。 ・第1希望のゼミに入れなかった学生は、最後までそのことが引っ掛かり、このゼミの活動では満足できなかったようだ。
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本来、プロジェクト活動は学生の企画・発案で起動すべきものだが、なかなか、学生さんからこれといったアイデアが出てこなかった。 ・そのせいもあり、学生の側は、どうしても「やらされている」「しかたなくやっている」という姿勢になりがちであった。 ・フィールドワーク <ul style="list-style-type: none"> 大学に近い「三八」の朝市に行くだけでもなかなか大変だった。 ○朝市のデメリットでもあるが、近くに駐車場がない。 ○約束の時間を守らない学生さんがいる。 ○現場で落ち合う約束にしても、時間通りに合流できない。 ○2限目が授業なので、開始に間に合うように大学に戻らなければならない。 ○カンカン照りだったので、炎天下を歩きたがらない。 ・ディスカッション <ul style="list-style-type: none"> なかなか積極的な討論にならなかった。ひとこと、ふたことの印象を言うだけで終わってしまう。論理的な説得力ある話し方ができない。 ・振り返り <ul style="list-style-type: none"> くどいぐらい同じことを何度も繰り返して言うようにした。 ・グループワーク <ul style="list-style-type: none"> お互いのコミュニケーションも少なく、うまくできなかった。 ・プレゼンテーション <ul style="list-style-type: none"> 一方的な発表はできるが、質問に対して臨機応変に答えられるレベルにはない。
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の3つの観点から</p> <p>(1)主体性</p> <p>(2)計画力</p> <p>(3)メンタルコントロール力 傾聴力</p>	<p>(1)主体性 教員が指示したことはやるというレベルにとどまった。</p> <p>(2)計画力 テーマの立て方からして、学生の側に当事者意識が希薄だったので、どうしても教員の側から計画を提示する形になった。</p> <p>(3)傾聴力 発信力に比べれば、人の話を聴くことができるとは言えるだろう。</p> <p>(4)メンタルコントロール力 我慢強く取り組む姿勢は弱い。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		木下ゼミ(調理)
テーマ		「発酵食品のおいしさ発見」プロジェクト
組織	連携先	株式会社「ビオック」 専務取締役 村井 裕一郎氏 〒(441-8087) 豊橋市牟呂町打田 111 の 1 Tel) 0532-31-9204 合名会社「小田商店」 社長 小田 晃一氏 〒(440-0093) 豊橋市横須賀町字元屋敷 1 番地 Tel) 0532-31-8529
	指導教員	木下 賀律子
	メンバー	矢原 美香 田村 由貴菜 石倉 亜紗美 伊藤 沙紀 伊藤 みさき 白井 日奈子 鈴木 李奈 高野 智世 村田 梨恵
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<p>(1) 昨今の塩麴ブームを契機として、日本の伝統食品である味噌や醤油などの発酵食品について学生達が考え直す良い機会だと思い、企画した。幸いなことに豊橋には、全国でも数少ない種麴を扱っている企業や地元の米を使って米麴や豆麴を作り、味噌・たまりの製造を行っている企業がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> • それらの企業から様々な知見を得て、調理の世界を広げる。 • 発酵食品を使った多彩なレシピを、考案する。 • 味噌作りを通して、我が国における味噌の分類や原料の違いを学ぶ。 • 自分たちが作った味噌を育てる喜びを知る。 • 味噌を使った料理を調べ、関心のある料理を各自で作ることにより調理の基礎技術の見直しをする。 • 作品発表時(創造祭)には、各自の料理の演出方法についても検討。工夫する。 <p>(2) 調理実習で行ったランチ実習の集大成としてレストランを開催する。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 調理担当とサービス担当の分担作業となるが、その中で自己を抑制する心や思いやりの心を養いグループワークを進めていく。 • 自ら率先して、挨拶や片付けを行うことができる力を身に付ける。 • お客様と接する中で、心遣いや言葉使いの大切さを学ぶ。

<p>プロジェクト活動内容</p> <p>4 月</p> <p>5 月</p> <p>6 月</p> <p>7 月</p> <p>8 月</p> <p>9 月</p> <p>10 月</p> <p>11 月</p> <p>12 月</p> <p>1 月</p>	<p>以下に活動内容の大筋を記す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトのテーマを話し合う。 ・調理室で「学生たち手による味噌作り」を実施。 ・「東三河外食産業展示会」にて学外研修。 ・オープンキャンパス時の「カフェ」開催において全員で協力する。 (菓子製作やホールの手伝い、また菓子作りのプレゼンテーションなどを通して、調理技術の向上や社会人に大切なコミュニケーション能力の向上を目指す。)(プロジェクト実行計画書の提出) ・身近な発酵食品である味噌の醸造元を見学。 小田商店(豊橋) まるや八丁味噌(岡崎) みそパーク(西尾) ・創造祭で発表の発酵食品を取り入れた料理作品の試作。 ・創造祭で開催予定のレストランメニューの試作。(スープ・チリコンカン・白ごまライスなど) (プロジェクト中間報告書の提出) ・発酵食品について、各自のパネル製作に取り掛かる。 ・展示のための料理作品完成(料理&スイーツ) ・レストランメニュー決定。(スープ中心) ・毎週木曜日授業後に準備を進めていく。(創造祭当日まで、可能ならば水曜日も) ・料理作品展示のリハーサル・会場設営の準備。 ・10 月は、ほとんど毎日授業後居残りで展示作品の練習や開催に向けての打ち合わせ(準備含む)をする。 ・スープ専門店に出かけて、店内の食器の配置や味・接客態度について研究。 ・飾り付けに必要なものを購入。その他各料理の材料を発注。 ・創造祭 10 月 27 日(土) B33: 料理作品&パネル展示 その他料理のデモンストレーション B32: レストラン営業 ・主に 5 月から、10 月までの 6 ヶ月間行動してきた自分の活動記録をまとめる。 ・プロジェクト発表に向けて皆で話し合い、報告書やパワーポイントを作成。 (プロジェクト成果報告書の提出)
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・味噌の醸造元を見学するなど、キャンパス外での学びの場を多く持てたことは教室では味わえない刺激もあり、有意義であった。また、そのことにより学生と教員、学生同士のコミュニケーションが深まり、その後の活動の核を作ることができた。 ・作品展示は、それぞれの学生が見落としてきた調理技術の確認と補足ができた。 ・パネル製作では、情報ビジネス学部の学生さんと調理師クラスの学生とのコラボレーションにより、今までにないアイデアあふれるパネルを仕上げる事ができた。 ・料理について、深く考えることができるようになった。 ・本プロジェクトを進めるに当たり、学生達が何事にも計画性や目的意識をしっかりと持つようになった。

<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・6 か月間の準備期間の間には、チームワークの乱れや作品製作が思うようにならず悲嘆にくれる学生もいたが、大きな問題になる前に話し合いの場を持つよう心掛けた。 ・料理作品の製作では、個人ですべて最後まで作成のため技術力に差が見られ、作品に今までの料理体験が現れていた。他は、ほぼ順調に運ぶことができた。
<p>学生の自己評価アンケート 結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動総括</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果は、主体性・計画力・傾聴力・メンタルコントロール力全て、すこぶる良い自己評価がされており、内心驚いた。俯瞰するに学生達のチームワークの良さが、十分発揮できたからだと考えている。 ・感想欄には、「すごい楽しかった」と記載してあるものや「新しい発見があった」などの意見もあり、積極的な取り組みの成果を見ることができた。 ・当日(創造祭)の作品発表は、自分以外の作品についても見どころ等を来場者に説明できるように、前もって皆の前で各自の作品について説明してもらった。どの顔も真剣で、今までしっかり作品と向き合ってきた様子が伝わってきた。この熱意は、評価に値すると思う。また、手作り味噌にチャレンジし5月から皆で育てる(熟成)喜びを分かち合うことが出来たことも良かったと思う。 ・今回は作品発表とレストラン営業と云う、二部屋に別れてのイベント開催であったが、多くの方々からご指導をいただき無事終了することができた。特にレストランの開催は、学生達からの強い希望から 生まれたものであったため、その動きは目を見張るものがあった。手作り味噌を使った豚汁や野菜たっぷりのスープ・チーズパン・チリコンカンなどの料理をお客様に提供し、お金を頂くことで社会性を養う力を身につけることができた。そして本プロジェクトは、何よりも学生たちの自己実現の場として有意義な活動になったと思う。
<p>プロジェクト活動で使った アクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させる ためにどんな工夫をしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学生達には、何事も早めにアナウンスし自分で考え行動しやすいよう手配していた事が、今回の成功(作品展&レストラン営業)に繋ぐことが出来たのではないかと感じる。 ・学生たちのそれぞれの得意分野(PC 関係・イラスト・テーブルセッティング・事務まとめなど)を生かすよう努めた。 ・この先の就職活動を意識して、事あるごとに(見学など)レポート提出を促し、自分の意見を紙面に書かせる練習をした。文の運びや誤字などにチェックを入れながら、学生達の考えも知る事が出来た。 ・プロジェクト活動後も何かと集まる習慣ができ、いろいろな場面に遭遇した時の学生の態度を見ていると(全員ではないが)、かなりフットワークが軽くなり良い意味で動ける、間に合う学生に成長してくれたと思う。 先日、高大連携授業で多くの高校生が来学した時も、爽やかな笑顔で気持ちよく調理のサポートを行い、高校生からも感謝されていた。

<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の3つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) メンタルコントロール力 傾聴力</p>	<p>(1) 主体性 全員で「レストランを開催したい」と教員に願い出た時は、意表を突かれた思いもしたが、最後まで態度を変えることなく頑張ることができた事は主体性を持って行動できたことと受け止めている。</p> <p>(2) 計画力 完璧とは言えないが、ほぼ立案した通り計画にそって行動できた。</p> <p>(3) 傾聴力 自己主張をする場面と傾聴する場面のバランスの取り方がうまくいかないケースもあった。</p> <p>(4) メンタルコントロール力 展示作品を作るにあたり、(完成度の高い作品にしたいと自己をマネジメントし)、我慢強く(回数・時間・根気)取り組む姿勢を目にすることができた。この力を就職してからも是非、生かしてもらいたいと願っている。</p>
---	---

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		防犯プロジェクト(千賀ゼミ、細谷ゼミ、中島ゼミ)
テーマ		働く意欲の向上を目指す取り組み
組織	連携先	豊橋警察署生活安全課 大崎逸朗課長 斎藤晃一巡査部長 0532-54-0110
	指導教員	千賀博巳 細谷邦夫 中島剛
	メンバー	下田代彩華 伊藤詩織 佐藤彩加 及川佐也佳 山本真未 岩本ちひろ 岩瀬友香 河合梨衣 渡辺彩 田中瑞絵 鈴木美香 間瀬由季子
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<p>企画意図: 学生たちが、人のために働いた経験が少なく、働く意欲が希薄なことから、働く意欲の向上を図る必要があると考えた。そうした中で、地域の安全・安心に学生としてどのように貢献できるのか考え、防犯ボランティアチームの活動を通して、働く意識と意欲の向上を目指す活動に取り組むこととした。</p> <p>概要: 豊橋警察署生活安全課と連携し、あいさつ運動や清掃活動をしながら地域を巡回して、安全・安心な街づくりを目指す。また、防犯、交通安全キャンペーンなどの活動を通じ、広く地域の安全・安心に貢献する。</p>
プロジェクトの活動内容		<p>4月11日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 各ゼミにて、防犯ボランティアチーム CTS (Clean Team SOZO) の活動説明をして、この活動に参加することを確認した。 <p>5月30日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクト立ち上がり準備(メンバー確認、代表選出) 豊橋警察署斎藤晃一巡査部長より、「豊橋市の防犯」と題し第1回講演会を実施した。 <p>6月14日(木曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 豊橋駅ペDESTリアンデッキにて、豊橋警察署生活安全課員と「防犯キャンペーン」を実施した。CTS メンバー12名が参加した。 <p>7月18日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 豊橋警察署斎藤晃一巡査部長より、「豊橋市の防犯」と題し第2回講演会を実施した。 <p>7月20日(金曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 名古屋市のウイブ愛知で行われた愛知県「女性安全フォーラム」に CTS メンバー4名が参加し、他の防犯ボランティアの人たちとの交流を図った。 <p>7月25日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1回地域巡回を行う。CTS メンバー6名参加する。 <p>8月4日(土曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 少年立ち直り支援事業(収穫祭)に CTS メンバー6名が参加する。 <p>9月8日(土曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 少年立ち直り支援事業(海岸清掃)に CTS メンバー4名が参加した。 <p>10月1日(月曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 第2回地域巡回を行う。CTS メンバー6名が参加する。

	<p>11 月 12 日(月曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第 3 回地域巡回を行う。CTS メンバー 7 名が参加する。 <p>11 月 13 日(火曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ CTS 代表学生が豊橋警察署一日署長を務め、防犯キャンペーン活動を行った。 <p>12 月 3 日(月曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年末特別警戒に CTS メンバー 11 名が参加して、豊橋駅前防犯キャンペーンを行った。 <p>12 月 5 日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学内で、豊橋警察署生活安全課大崎課長、斎藤巡查部長の指導で、自動車防犯診断、痴漢防止講話・訓練を行った。CTS メンバー 12 名が参加した。 <p>1 月 9 日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各ゼミで、防犯プロジェクトの総括を行った。 <p>その他</p> <p>CTS の活動に対して、愛知県地域安全研究会及び豊橋警察署から感謝状をいただいた。</p>
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<p>(1) 6 月 14 日の「防犯キャンペーン」では、初めてであったがメンバーが積極的に痴漢防止のキャンペーンを行った。</p> <p>(2) 「女性安全フォーラム」では、1000 人を超える参加者があり、多くの女性が安全・安心な社会を目指して頑張っている姿を見て、自分たちの活動の大切さを実感した。</p> <p>(3) 回数が少なかったが、地域の巡回では、積極的にあいさつや清掃活動をする姿が見られた。</p> <p>(4) 少年立ち直り支援事業では、他の多くのボランティア団体の人たちと活動に参加したため、いろいろな人たちとの交流ができ、自分たちの活動に自信を持つとともに、活動の楽しさを実感できた。</p>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>(1) 地域の巡回は、6 月より実施する予定であったが時間の調整がつかず 7 月 25 日が第一回であった。 また、他のキャンペーンなどと重複して、回数が少なかった。</p> <p>(2) 豊橋警察署の職員の方から、CTS が活動できるキャンペーンなどの紹介をいただいたが、授業の関係などで参加できないことがあり、調整が難しかった。</p> <p>(3) 学生の主体的な活動を目指していたが、豊橋警察署や豊橋市社会福祉協議会などとの連絡は主に教員がしていたため、学生は活動の計画を立てるとき受動的にならざるを得なかった。</p>
<p>学生の自己評価アンケート 結果を見ての感想・意見 プロジェクト活動の総括</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれの活動に対する学生の感想(抜粋) <p>(1) 講演会 豊橋市内の犯罪件数などを知り、犯罪を身近なものに感じた。また、自分も防犯意識を持たなければと思った。</p> <p>(2) 防犯キャンペーン 初めて街で通行人に、キャンペーンしました。配り方やあいさつなどしっかりできなければと思いました。 人に伝えることのむつかしさを知りました。 自分自身も、防犯の意識を持つようになりました。</p> <p>(3) 地域巡回 地域のひととあいさつを交わし笑顔をもらえてよかった。あいさつが人と人とのつながり</p>

	<p>のきっかけ作りになりました。</p> <p>予想以上にごみが落ちていて、捨てる人はどういう気持ちで捨てたのだろうかと思いました。</p> <p>歩いている人が少なく、地域がこういう状況だと空き巣など犯罪が起きるといふ豊橋警察署の方の話が頭に浮かびました。</p> <p>(4) 少年立ち直り支援</p> <p>はじめはなかなか自分から行動できませんでしたが、少しずつ自分のできることから手伝えるようになりました。</p> <p>(5) 自転車防犯診断・痴漢防止講演・訓練</p> <p>無施錠の自転車の多さに驚いた。防犯意識を高めることが必要だと感じた。</p> <p>痴漢防止講演・訓練で、講師の方が、「まず自分の身を守る。逃げる。」と言われたが、本当にその時には、大切だと思った。</p> <p>・ 感想・意見</p> <p>学生は防犯プロジェクトの活動を通じて、それぞれで考え自分のできることから行動するようになった。</p> <p>防犯プロジェクトは、防犯に限定されたプロジェクトであるが、個人差はあるものの機会を与えれば、学生たちは、自ら考え行動できることが分かった。</p> <p>また、防犯活動を通して、はじめは不安げに活動に参加していた学生が、後半では自信を持って行動できるようになったことは、一つの成果と思われる。</p> <p>一方で、年度の計画はあったが、警察署や福祉協議会との連携の面では、スケジュールの調整ができずいくつかの活動に参加できなかった。</p> <p>学生の自主性を高めるために、今後は計画段階での学生の参加や、関係機関との連絡調整をできるようにしていきたい。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブ・ラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加するためにどんな工夫をしたか</p>	<p>・ 企画・立案・行動と学生が主体的に取り組むべきものであるが、関係機関との連携では、教員が調整する必要があった。</p> <p>・ フィールドワーク</p> <p>事前の調整は難しかった。それぞれの活動では、積極的に参加しようとする姿が見られた。</p> <p>・ ディスカッション</p> <p>参加し、行動することが防犯活動であることから、その中で互いに意見を交換する場面が少なかった。</p> <p>・ グループワーク</p> <p>CTS 全体で行動する機会は少なかったが、キャンペーン活動などでは互いに協力して活動していた。</p> <p>・ プレゼンテーション</p> <p>準備の時間の関係もあったが、自分が活動したことは発表できるが、その活動の意味づけや内面を振り下げた質問には答えられない。</p> <p>・ 学生たちは、活動の内容や意味が分かれば積極的に参加するが、活動内容が見えない場合は消極的であった。このため、できるだけ前年度の様子を説明したり、豊橋警察署の方からの説明を密にして、学生たちの不安や疑問に答えるようにして、参加を促した。</p>

<p>学生の資質の向上度合についての意見 次の 3 つの観点から (1) 主体性 (2) 計画力 (3) 傾聴力 (4) メンタルコントロール力</p>	<p>(1) 主体性 学生に個人差はあるが、計画段階では受け身であっても、活動場面では主体的、積極的に参加しようと努力する場面が見られた。</p> <p>(2) 計画力 本プロジェクトでは、行事の計画段階では教員が調整しているため、学生の計画力の向上を図る場面は少なかった。</p> <p>(3) 傾聴力 駅前キャンペーンや少年立ち直り支援などでは、面識のない人たちと対応することが多く、傾聴力を養うことができたと思われる。</p> <p>(4) メンタルコントロール力 少年の立ち直り支援活動では、周囲の状況を判断して自らの行動を律する必要もあったので、メンタルコントロール力を必要としたが、全体の活動を通じて、メンタルコントロール力が向上できる場面は少なかった。</p>
--	---

プロジェクト成果報告書(寺本)

チーム名(ゼミ名)		寺本ゼミ
テーマ		身近な自然発見・発信プロジェクト2012
組織	連携先	NPO法人 東三河自然観察会 愛知県 三河港務所
	指導教員	寺本和子
	メンバー	キャリアプランニング科 2年 金田 春奈 太田 有香 村澤 理奈
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然に接することによって、自然に対する感性を育む。 ・自然環境の現状を知り、環境保護への意識を高める。 ・すべての活動に「環境」を考慮しなければならない現代において、自然環境の見方を教養として身に付ける。 ・三河湾の汚染状況と浄化対策について学ぶ。 ・プロジェクトを通して得た知識を生かすには、どのような行動を取ればよいのかを考える。 ・NPO東三河自然観察会、および、愛知県三河港務所のメンバーとの交流を通して、社会人としてのマナーや積極性を養う。
プロジェクトの活動内容		<p>このプロジェクトでは、まず、東三河の自然(竹島(蒲郡市)、東三河ふるさと公園(豊川市)、葦毛湿原(豊橋市))の自然環境の現状を、自然観察会に参加することによって知ることに努めた。観察会では、NPO法人東三河自然観察会の会長をはじめとする会員の人たちと共に観察し、会員のアドバイスを受けながら観察記録をまとめた。</p> <p>その後、上記の観察地の中でも特に竹島の観察会から知った三河湾の生きもの、そしてそれらが生育・生息する三河湾の環境に興味を持った。</p> <p>したがって、当初の予定(自然観察の結果をホームページで発信する)を急遽変更し、三河湾の汚染の現状、浄化対策とその効果について、より深く学ぶことを選んだ。三河湾の汚染状況の現状と浄化対策について、主にホームページにより基礎知識を得ると共に、特に「シーブルー事業」の内容やその効果について学ぶため、愛知県三河港務所へ行き、所員の方々からお話を伺い、まとめた。</p>
うまくいったこと (成功事例)		<ul style="list-style-type: none"> ・普段意識することの少なかった身近な自然を観察することを楽しみ、人間以外の多くの生き物が生息・生育していることを知り、興味を持ったこと。 ・それまでは意識することも無かった三河湾の汚染の状況に興味を持ち、その汚染状況と浄化対策について知ったこと。 ・社会人と接する機会が得られたこと。

<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>学生が自ら計画し進めていくという目的は、ほとんど達成できていない。具体的な失敗例をいくつか挙げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会人と接するときも、自ら進んで会話を進めるということではできなかった。(ただし、三河港務所では、あらかじめ準備されたものではあったが、いくつかの質問を行うことができた。) ・面会のアポイントメントを学生に取らせようと考えたが、動こうという気配が感じられなかったため、結局指導教員が対応することになった。 ・辛抱強く学生が動くのを待つ必要があるかもしれないが、12月までに計画に従った成果をまとめるためには限度がある。 <p>学生に失敗を経験させ、本当に主体的に動くように仕向けるためには、成果を求めることを止めることが必要である。または、失敗、うまくまとまらなかったという成果を発表し、このような結果も可とすれば良いか？</p>
<p>学生の自己評価アンケート 結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>「普段行くことのないところに行けてよかった。」、「知らなかったことを知ることができた。」という評価が得られた。一方で、「ゼミ生どうしで議論することはあまりしなかった。」との評価である。これは、予想された評価である。</p> <p>ゼミ生の性格や、ゼミ生どうしの関係(友達であるなど)によって、議論が活発に行われるかどうか左右されると思える。</p>
<p>プロジェクト活動で使った アクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させる ためにどんな工夫をしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・社会人と接する機会の提供。 その中で、社会人と接する場合の礼儀、コミュニケーションを取り合うという機会を提供した。 ・自分たちでアポイントメントを取る、社会人(特に三河港務所)への質問内容の検討など、自ら計画を進めてゆく能力を養う場の提供。 <p>学生たちへの励ましの言葉がけ(会話に参加するように、計画を自ら進めるように等)を、場に応じて行なうように努めたが、芳しい成果は得られなかった。</p>
<p>学生の資質の向上度合い についての感想</p> <p>次の3つの観点から</p> <p>(1)主体性 (2)計画力 (3)メンタルコントロール力 傾聴力</p>	<p>(1)ほとんど養われていない。 (2)ほとんど養われていない。 (3)これは、養われたと思う(ゼミ生どうしの議論を除く)。ただし、このプロジェクトを行う以前から、この能力についてはある程度持っていたと思う。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		豊橋うどんプロジェクト(花岡)
テーマ		豊橋カレーうどん及び豊橋うどん・そば店に関する市場調査
組織	連携先	株式会社 東京庵 戸倉 信一郎 〒442-0806 豊川市馬場町薬師 90 TEL0533-84-3860 E-mail tokyoan@tokyoan.co.jp
	指導教員	花岡 幹明
	メンバー	キャリアプランニング科 1 年 飯田望(21236402) 大岩明日香(21236404) 永島佑美(21236409) 前田華那(21236412) 安井友香(21236414) 情報ビジネス学部 4 年 岩田翔飛郎(20823103) 大堀章吾(20823706) 原田敏幸(20923118) 大坪孝嘉 (20923204) 杉浦史彦(20923212) 古田和也(20923223) 情報ビジネス学部 3 年 山本宜輝(21023221) 中野景子(21023115) 太田詩織(21023204) 佐々木千聡(21023209) 高畑広恵(21023212) 情報ビジネス学部 2 年 竹内亨仁(21123121) 白濱祥輝(21123218) 辻井友絵(21123225) 長坂良恵(21123229)
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		○地域貢献(豊橋麺類食堂組合青年会からの依頼) ○市場調査(マーケティング)に関する知識・手法の実践的学習
プロジェクトの活動内容		<p>豊橋麺類食堂組合青年会との協働による豊橋地域におけるうどん・そばに関する総合的調査の実施と「豊橋うどん」の普及に関する貢献活動を行う。</p> <p>本年度は、全体的な市場調査にむけての準備・基礎段階として、市場調査(アンケート)手法を学習し、現状把握のための実態調査を行う。また、豊橋カレーうどんに端を発する「豊橋うどん」の普及(シティ・プロモーション)に対する貢献活動として、豊橋のうどんに纏わるルーツやうどん店の特徴などに関して様々な関係者にインタビュー調査を実施し、HP やブログにおける情報発信を行う。</p> <p>(1)準備段階(4~7月) ○麺類食堂組合青年会との顔合わせ 5月29日と6月25日の二回に分けて、豊橋麺類食堂組合青年会のメンバーとの顔合わせを実施した。 ○市場調査に関する講座 学生メンバー及び麺類食堂組合青年会メンバーを対象に、市場調査の実施方法に関する講座を開講した。講師に青山学院大学経営学部マーケティング学科芳賀康浩教授を迎え、市場調査の進め方について、具体的なアドバイスを頂いた。</p> <p>(2)実施段階(9~12月) ○活動報告と協力依頼(9月) 豊橋カレーうどんの仕掛け人である豊橋観光コンベンション協会へ、活動報告と協力</p>

	<p>依頼のために訪問した。豊橋うどんに関する情報収集先や豊橋カレーうどんのファンサイトにおける Web(市場)調査の提案・依頼を受けた。</p> <p>○アンケート調査の企画・制作・実施(9月～)</p> <p>豊橋うどん市場に関する市場調査(アンケート調査)の企画(テーマ設定)から製作・実施の全てを行った。今回の調査テーマは現状把握を目的とした豊橋のうどん店利用者実態調査である。また、アンケートの作成に伴い、告知ポスターの作成も実施した。</p> <p>アンケート調査の実施期間は、11月月末から12月上旬で、各店舗で2週間程度行われた。実施店舗は組合に所属する店舗で約60店舗であった。アンケートは6000枚配布し、1758枚回収された。1月25日現在、集計作業は終了し、解析作業を行っている。2月中旬に、アンケート結果に対する報告書を組合、協力店舗に提出する予定である。</p> <p>○豊橋うどんのルーツを探る ～うどん店店主へのインタビュー実施～</p> <p>プロジェクト当初より、「豊橋うどんに関わるには、その歴史やうどんにまつわる知識・情報を集めては」という声があった。そこで市場調査と並行して豊橋うどんに関する情報収集のため、うどん店店主へのインタビュー調査を実施した。</p> <p>第1回目は、11月16日に豊橋麺類食堂組合の理事長の原勉様(そば源)と前理事長の度会武彦様(勢川牟呂店)から、豊橋うどん及び、うどん店の歴史から現在のうどん店のあり方などについてお話を伺うことができた。また、私たちのような若い世代がうどん店を利用するためには何が必要かといった内容でのディスカッションも行った。インタビューの内容については、文字起こし、現在校閲をさせていただいており、HPで公開する予定である。(1月25日現在、作業は校閲段階にあるが、一部HP、ブログで情報公開を実施している。)</p> <p>○ブログ・HP(ホームページ)の作成</p> <p>アンケートの結果やインタビューの成果などを公開する場として独自HPの作成は当初よりの課題の一つであった。アンケートを実施した早々に、アンケートにご回答くださった方より、大学のプロジェクトHPにご連絡を頂いた。そこで、予定を早め、ブログとHPを作成した。運用体制等は今後も検討・修正を行って行く予定である。</p> <p>HP : 豊橋うどんプロジェクト (http://udonproject.web.fc2.com/)</p> <p>ブログ: 豊橋うどんプロジェクト～学生による豊橋うどん広報日誌～ (http://udonproject.blog.fc2.com/)</p>
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<p>準備段階 麺類食堂組合青年会との顔合わせ</p> <p>本プロジェクトにおいては、協力者であり、依頼者でもある豊橋麺類食堂組合との協働が欠かせないものであった。プロジェクト当初に、公式・非公式に学生と組合メンバーとの接点があったことは、互いを理解する重要な機会であった。</p>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>本プロジェクトでは、個別の活動内容をあまり具体化せず、学生の状況と組合の要望や体制を探りながら、活動を行ってきた。そのため、変更や突発的な対応なども多く、また、学部と短大の混成チームということで活動時間が合わずに、ワークバランスの偏りもあったと思う。</p> <p>学生の反省にも「もっと計画的にすすめれば良かった」とあったが、ルーチンな作業は比較的計画通りに進められていた。組合や関係者などとの交渉や製作・改訂作業など、集団での意思決定を要する活動が多く、スケジュール変更も度々あったため、計画的に出来なかったと感じたのだろうが、止むを得ない所もある。ただし、上述した活動時間を学部と短大で分けざるを得なかったことは、作業を遅らせる要因であった。</p>

<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>本プロジェクトは、ゼミ単位ではなく、有志での活動であったためか、主体的に活動できるメンバーが多く、個別の作業は計画的に進められていた。学年や学科が違うため、最初は話し合いも順調とは言えなかったが、協働を始めれば、問題なく進められていた。</p> <p>所属・学年の違いで、混成メンバーでの協働は限られてしまったが、個々の活動成果も十分あったと思う。アンケート結果からも、継続を示唆するコメントがあるように、学生の意識も高まってきている。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>市場調査(マーケティング)に関する知識・手法の実践的学習に関しては、外部の専門講師を招聘したこと。単なる、マーケティングの座学ではなく、市場調査の経験豊富な講師により、具体的に実践する際の問題、注意点について講義していただき、実際のテーマである豊橋うどんに関する調査プランの作成とディスカッションが行えた。また、当日は麺類食堂組合青年会のメンバーにも参加をお願いし、共通理解を深めた。その後、質問表の作成やその他活動においても組合とのディスカッションを持ち、作業を進めてきた。</p> <p>上述したように、本プロジェクトは学生有志によるメンバー構成であったため、基本的には興味を持って参加していたと思う。メンバー募集に際しては、活動の意義やこの活動を通じて得られるものについて詳細に説明することを心がけてきた。また、学生側の要望(本プロジェクトに期待するもの)も個々に話を聞くようにした。学生個々のプロジェクトに参加する誘因(インセンティブ)がわかれば、活動内容や役割を誘導することができる。その際、状況や成果について十分説明することも行ってきた。</p>
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の3つの観点から</p> <p>(1)主体性</p> <p>(2)計画力</p> <p>(3)メンタルコントロール力 傾聴力</p>	<p>(1)主体性 参加学生の大半は、個々に明確な参加目的があり、主体的な活動は多く見られた。ただし、主体的な行動の判断に迷っているケースもある。この場合は、一度、話し合うことで、安心を与えれば、以後は自らの判断で活動できるようになる。</p> <p>(2)計画力 上述したように、活動の全体的な流れは非常に変動が大きく、学生には計画性が乏しく見えたかもしれないが、逆に事前準備の必要性やスケジューリングの意識は高まったように思う。学生報告の反省(「もっと計画的にすすめれば良かった」)もその一例であるが、学生自ら、組合との折衝状況や作業現状、進捗(デッドライン)から、先を読み準備を始めるようなケースもあった。</p> <p>(3)メンタルコントロール力・傾聴力 メンタル(辛抱強さ)については、上述したように、主体性やモチベーションの高い学生は十分であった。傾聴力に関しては、会議等では問題はなかった。チームで作業をする場合が多く、全てを把握しているわけではないが、互いに連携がとれているようで十分であったと思われる。</p>

プロジェクトテーマ
We ♥ ROSE プロジェクト

担当 村松 史子

1. プロジェクト概要

東三河地方の代表的な産業でもある花農家(バラ園)と連携をして、バラの栽培方法や工夫を理解し、製品化されて販売に至るまでの過程を体験的に取り組むことによって、地域の産業の実態を知り、地域のために何ができるかを考えさせるものである。

バラは学生にとっても興味・関心度も高い。学生が得意とする分野(育てる・作る・売る)の3次に分けて取り組んだ。販売促進の学生コンサルタントをイメージしながら消費者の立場に立って、どのようにすれば購買者に喜んでもらえるかにポイントをおいて考えさせ、それぞれのアイデアを形にすることの楽しさ・販売の工夫・利益を得る事の大変さを体験的に学習する。

(1) 実施内容

- ①バラ園を見学し、バラの栽培方法・工夫の様子を知る。
- ②新鮮なバラの販売ルートを理解し、地産地消のシステムを理解する。
- ③SOZOブランド商品のマネジメント(青いバラの作成)
- ④「バラについての研究」を学園祭で発表し、販売をする。
- ④学生 아이디어を生かし自主性を育てる。

(2) 外部提携先

- ・「Watanabe Rose Nursery」渡辺農園 渡辺 真臣 氏
〒441-3602 田原市八王子町道上18 Tel 0531-37-0117
- ・ガーデンガーデン株式会社 坂井 奈津子 氏
〒441-3147 豊橋市大岩町字境目35-8

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

本プロジェクトは、昨年からの継続であるために、学生の新しい発想がやや乏しくなることが予想されるので、スタートにあたりプロジェクト名そのものの見直しをした。

今年度は、I(私)ではなくWe(私たちは)にしたいとの意見が上がり、話し合いの結果、「仲間意識を深め、絆を大切にしよう」をテーマとすることに至った。そこで、プロジェクト名を「We ♥Roseプロジェクト」と改称した。

表題からは具体的なプロジェクトの内容のイメージ化が難しいことから、サブタイトル「～バラ生産農家と連携した青いバラの制作と販売～」としてスタートした。

次に、学生がプロジェクトとしての認識を明確にするために、「自分は何をしたいか」の目標をもって行動することにした。

- ・育てたい(第一次生産者:生産)・・・柏原、近田、鋤柄、大須賀
- ・作りたい(第二次生産者:加工)・・・鋤柄、大須賀、村田、山口、林、村井
- ・売りたい(第三次サービス:販売)・・・村越、近田、村井、川合、山口、大林

上記第一次～第三次までの目標を考えた結果、「何を取り組めばよいか」「具体化するためにはどう進めていったらよいか」が明確になった。

その後、役割を分担し、状況の確認と報告をしながら提携先からの指導を受けた。学生たちに自ら

考えて行動する姿がみられるようになり、プロジェクトの計画が進行した。教員は、学生全員で行動する際のサポートと昨年の実践をふまえてアドバイスし、必要に応じて相談にのりながら学生の状況把握に留めた。

バラ園見学は、学生たちがバラに対する想いを深める機会でもあり、プロジェクトを実践する上で効果的であった。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

3.1 プロジェクトの評価

このプロジェクトは、学生が自ら考え、実践することを最大の目的としたことから、指導は、助言程度に心がけた。

学生たちは、「We Roseプロジェクト」の実践を通して、自分の得意な面をグループの中で活かすことの喜びと他のメンバーを認め活かすことの大切さを感じ取っていた。

その結果、学生たち全員が一丸となって計画・立案・実践・成果発表に至る一連の活動を楽しみながらできたことは何よりの成果と考える。

プロジェクト終了後の主な学生の感想は以下の通りである。

- ・「ゼミの仲間との深い信頼が生れ、良い思い出と体験になりました」
- ・「バラ園の見学を含め、学ぶことが多くありました」
- ・「メモした販売数が合わなかったのが苦労しました」
- ・「お客様に『綺麗なバラだね』と喜んで頂きました。『ありがとう』の一言で私たちは元気づけられました」

上記の学生の声から「働くこと」への興味・関心をもち、プロジェクト名をI(私)からWe(私たちは)に改称して「絆」の大切さを知る場でもあった。

「Watanabe Rose Nursery」渡辺農園の渡辺氏、ガーデンガーデンの坂井両氏の無償な協力は、本プロジェクトを実施する上で大きな役割を果たしていたことに感謝している。

3.2 プロジェクトの改善点

- ・ 前年度と同じプロジェクトであるため、前年度作成したブログを継続することにした。ブログの担当者も指名したが、本年度の学生たちの発想では無いためあまり興味を示さず、一度の書き込みもなく終わってしまった。次年度は、ブログを活用した遠距離の有効な情報交換の方法を考えさせたい。
- ・ 学園祭の「おしる粉屋」との併設であったため、会計等がはっきり分離できなかったのが能率的な会計処理の仕方を考えさせたい。
- ・ 販売価格の設定が難しかった。品質を考えると高値になるが、他の模擬店の価格で考えると安価となるため薄利となる。今年度は学生の考えで設定したが、今後は提携先にアドバイスを受けて価格の決定をさせるようにしたい。

② プロジェクト演習協力企業・団体一覧

愛知県豊橋警察署

医療秘書教育全国協議会

NPO 法人 東三河自然観察会

(名)小田商店

こども未来館ここにこ

(株)東京庵

豊橋観光コンベンション協会

(株)はと屋 みそぱーく

(株)まるや八丁味噌

ワタナベローズナーセリ

(敬称略順不同)

③ 発行済パンフレット

豊橋創造大学

本学では「アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証」を実現するために、具体的展開を他大学と連携を取りながら、以下の4事業を柱とした事業展開を、学生の総合的な「就業力」の育成を図ることを目的に実施します。

①メンタルタフネス講座の正規科目化の取り組み

第22年度「大学生の就業力育成支援事業」において開発・実施してきた「メンタルタフネス講座」は、学生の「メンタル面の育成」を通して、就職後の早期適応と向上するための講座であった。今回の取組では、これまでの実施経験や学生からの要望等を反映させ、「実践検証」を適用し総合的な「就業力」の育成を図るとともに、新しい「メンタルタフネス講座」として、キャリア科目の実務科目として正規科目化する。

②自己理解促進のための採用面接の疑似体験（バーチャル人事体験）

アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を促進する活動として、学生が採用面接官を疑似体験するバーチャル人事体験を行う。特に普段経験することのない「面接官」の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて、企業側のニーズや、自己の職業観を理解することが可能となる。

③地域企業と連携したプロジェクト活動

実社会におけるプロジェクトベースでの仕事の増加状況を鑑み、プロジェクトの体験を通して産業界ニーズとのギャップを埋める「プロジェクト実習」科目を展開する。学生は、ゼロから企画を立ち上げ、各々の得意な得意な課題に取り組みることによって、自主性や創造性、さらにはリーダーシップや他者との協働が、いかなるものであるかを実体験を通して学ぶ。

④学生・連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実施

学生自ら行動起こすアクティブラーニングをコンセプトとして、それを達成するための5つの要素（グループワーク、ディベート、フィードバック、プレゼンテーション、振り返り）を包括的に含むインターンシップ活動を連携大学間にも拡大し、学生・連携大学・地元企業との3者間の相乗効果によって更なる成果を挙げる。

豊橋創造大学短期大学部

アクティブラーニングの手法を最大限活用して、メンタルタフネス育成講座やプロジェクト活動を中心とした以下の4事業を展開し、学生の主体性を育み、産業界のニーズと大学における人材育成のギャップを埋めるような活動を実施します。

①長期にわたる就職活動に耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施

「ストレス」の基礎理論、「セルフモチベーション」講座を実施。知識を伝達する座学に加え、課題演習の機会を多く設けてメンタルタフネスをコントロールし、リソースを最大限のノウハウは、これが一生涯活用できるものであることを理解させる。

②庭路をつなぐ、臨機応変に対応するための採用面接の疑似体験（ロールプレイ）

学生が面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者との立場の両方を体験し、企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させる。この経験が、他学生の良い成長機会を自分の場合に関わらずに活用できるように学んでいくことになる。

③地域組織と連携したプロジェクト活動

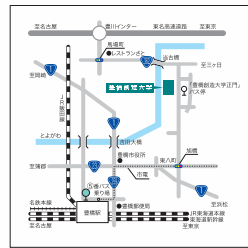
地域組織・企業と関わりを持ちながら、企画・計画・実行するプロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの運営を通して、学生自らが主体的に学ぶ「SOZOプロジェクト」を推進する。学生は、これまでに学んできた知識が、実社会でどのように活用されているのを知ることが出来る。

④アクティブラーニングの手法を使った教育経験の共有

あらゆる場面で、アクティブラーニングの手法として5つの要素（グループワーク、ディベート、フィードバック、プレゼンテーション、振り返り）を含むような活動を展開し、高度化を図っていく。各大学の教員・学生代表がプレゼンテーションを行い、お互いの評価・フィードバックを行いながら、各大学の教育力のレベルアップを図る。

事業期間終了後の取組と評価

事業期間終了後は、本取組で形成した大学間ネットワークを母体として、中部圏の他大学をも含めた、より広範な中部圏教育革新ネットワークを形成する。評価の実施体制としては、各大学独自の成果評価を踏まえ、チームにおける連携FDの成果を自己評価、中部圏地域大学教育革新推進委員会による自己点検・チーム評価を踏まえて、中部圏産学連携会議における外部評価を実施する。



SOZO 豊橋創造大学

- 情報ビジネス学部 キャリアデザイン学科
- 経営学部 経営学科
- 短期大学部 キャリアプランニング科

T440-8511 豊橋市牛川町松下20-1 渉外キャリアセンター
TEL.050-2017-2104(直通) FAX.050-2017-2112(直通)
http://www.sozo.ac.jp E-mail: job@sozo.ac.jp

平成24年度

文部科学省 大学教育改革推進事業 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

取組名称 「中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化」

取組テーマ

- ①アクティブラーニングを活用した教育力の強化
- ②地域・産業界との連携力の強化

※アクティブラーニングは、授業や一対一の指導を主とする従来の講義形式に加え、学生が授業内容、授業方法の導入・応用、授業効果の検証等に主体的に関与し、知識・技能・態度を総合的に学ぶこと。学生の主体的な学習を促した授業形態を総称するもの。

事業実施期間

平成24年度～平成26年度

文部科学省の平成24年度新規事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」(本事業は、産業界のニーズに対応した人材育成の取組を行う大学・短期大学が地域ごと共同して地元の企業、経済団体、地域の団体や自治体等と産学協働のための連携会議を形成して取組を実施することにより、社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材の育成に向けた取組の充実が図られるよう、国として財政支援を行うことにより、幅広い職業養成に比重を置く大学の機能別分化に資することを目的としています。)において、豊橋創造大学及び豊橋創造大学短期大学部をはじめ中部圏の23大学が連携し取組む「中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化」が選定されました。

SOZO 豊橋創造大学

平成24年度 文部科学省 大学教育改革推進事業 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業 中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化

大学グループと地域・産業界との連携の趣旨

中部圏23大学(短期大学を含む以下「中部圏大学グループ」と呼ぶ)は、これまで各大学独自で学生の社会的・職業的自立を目指して、入学から卒業までの間を通じた全学的かつ体系的な指導を行う体制整備を進めるとともに、教育の質保証を目的として教育理念に基づく学士の検討を進めてきた。この過程で、大学個々が、キャリアガイダンスが整備され、教育改善を本格的に進める舞台が整ってきました。一方で、従来の教育改革の議論が、大学内における教職員間にとまっていたために、「育成すべき資質」が、真に地域・産業界のニーズに合ったものであるかに関して、大学側が十分な理由を得ている状況ではありませんでした。

そこで、中部圏大学グループは、上記の共通認識のもとに、相互に連携しつつ、地域・産業界と積極的に対話を進めることを通じて、大学の教育理念を尊重しつつ、地域・産業界が学生に求める資質として提示している「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に合致する人材を送り出すための現実的な教育改革力の強化を図ることを目標に定め連携することになりました。



大学グループにおける取組テーマの達成目標・取組内容・成果

①アクティブラーニングを活用した教育力強化

取組内容 連携FD等を通して、どのようなプログラムや学習目的において、いかなるアクティブラーニング形態が用いられ、どのような教育効果を生んでいるかについて、成功例・失敗例に関わり、数多くの参加大学間で情報を収集・共有し、整理体系化する取組を進め、その成果を、中部圏産学連携会議における産業界との対話を通して検証する。

達成目標 各大学の教育理念に基づいて学生を育てる資質と、地域・産業界が求める資質を実践の事例とともに対話を通じ、より効果的な教育方法を生み出すサイクルを形成するとともに、地域・産業界に大学の包括的な教育使命と、教育現場の実態に関する情報を提供する仕組みを構築する。

②地域・産業界との連携力強化

取組内容 地域・産業界との連携によるインターンシップの高度化を図る。本取組では、インターンシップの内容や教育効果の改善の領域に、大学と地域・産業界が関わる仕組みづくりが行われる。また、地域・産業界との連携による授業の開設が進められる。本取組を通して、連携型授業の導入を促進し、地域・産業界の知識や生きた体験を教育現場に取り入れ、産業界のニーズに対応した人材作りを進める手立てとする。さらに、地域・産業界との対話・連携を進める上での協議会等を設置し、地域・産業界が大学と一体となって、大学の教育目標に合致しつつ、産業界ニーズに対応した人材育成のための仕組みをつくる。

達成目標 地域・産業界と連携したインターンシップや連携型授業の導入と改善を通して、質が保証された教育プログラムを産学連携で生み出す仕組みを構築する。

成果 テーマに一貫した大学の教育改革力強化

教育改革のために前に踏み出す力

- 各大学が個別に行っていた教育改善を、他大学と連携を相補しながら行う。
- 大学が独自に行っていた人材育成を、地域・産業界と連携した教育改革につなげて実施することが出来る。

教育改革のために考え抜く力

- 各大学で良い実践や失敗を共有し、分析・知識化する。ことを通して、創造性を生み出すことができる。

教育改革のためにチームで働く力

- 異なる教育理念や背景を持ったそれぞれの大学や、異なる視点から大学教育を見ていく地域・産業界に耳を傾けると同時に、自らの立場を相手に理解できる方法で説明する姿勢を養うことができる。
- 知識化された成功例や失敗例を、社会で活用可能な方法で発信することができる。

大学グループの構成

中部圏23大学(短期大学を含む以下「中部圏大学グループ」と呼ぶ)は、これまで各大学独自で学生の社会的・職業的自立を目指して、入学から卒業までの間を通じた全学的かつ体系的な指導を行う体制整備を進めるとともに、教育の質保証を目的として教育理念に基づく学士の検討を進めてきた。この過程で、大学個々が、キャリアガイダンスが整備され、教育改善を本格的に進める舞台が整ってきました。一方で、従来の教育改革の議論が、大学内における教職員間にとまっていたために、「育成すべき資質」が、真に地域・産業界のニーズに合ったものであるかに関して、大学側が十分な理由を得ている状況ではありませんでした。

そこで、中部圏大学グループは、上記の共通認識のもとに、相互に連携しつつ、地域・産業界と積極的に対話を進めることを通じて、大学の教育理念を尊重しつつ、地域・産業界が学生に求める資質として提示している「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に合致する人材を送り出すための現実的な教育改革力の強化を図ることを目標に定め連携することになりました。

東海Aチーム アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証を行う。 ・名古屋商科大学 ・三重大学 ・愛知産業大学 ・樹山女子学園大学 ・中部大学 ・豊橋創造大学 ・豊橋創造大学短期大学部	東海Bチーム 地域・産業界との連携力強化と検証を行う。 ・名古屋産業大学 ・岐阜大学 ・同朋大学 ・日本福祉大学 ・名城大学 ・愛知大学短期大学部	静岡チーム 静岡県を舞台として教育力・連携力の強化を図る。 ・静岡大学 ・静岡理工科大学 ・静岡英和学院大学短期大学部 ・東海大学短期大学部	北陸チーム 北陸地方を舞台として教育力・連携力の強化を図る。 ・金城大学短期大学部 ・金沢大学 ・福井大学 ・富山県立大学 ・富山国際大学 ・金沢工業大学
---	---	--	---

※大学グループの幹事校は三重大学、下欄はチームを代表する副幹事校

組織図





1 豊橋コンテナターミナルの発展可能性に関する調査研究

担当教員 石田 宏之
協力(左)日本通関(株)豊橋支店(株)豊橋支店 海運研究所 豊橋三河港事務所(株)豊橋コンテナターミナル豊橋市産業経済局

三河港は、重要港湾の中で「重点港湾」として位置づけられ、港湾整備に期待もたれている。また、三河港は、輸出入完成自動車の基地(豊橋地区、田原地区、蒲郡地区)であるとともに外貨貨物にとって重要な役割を果たしているコンテナターミナル基地(神野地区公共埠頭)ともなっている。また、公共埠頭でのコンテナ取扱量は増加傾向を示しており、今後もコンテナ基地が発展する可能性はある。プロジェクトのテーマとして「三河港豊橋コンテナターミナルの機能と役割(発展性可能性)」を設定した。

豊橋コンテナターミナルの後背地は広く、立地している企業も多い。コンテナ貨物の潜在量はかなりあると推測される。また、現状のコンテナターミナルの能力は、現状の2倍の量を取り扱うことができる。今年度より、自動車部品等を対象としたロシア向け船舶開設が予定されている。また、今後の数量拡大に伴い常備の数を減らすことによりロードトラックの短絡は1個当りコンテナの輸送費を減らすことが可能となり、さらに数量拡大は、アジア地区への高効率の開設も今後考えられる。

このように、豊橋コンテナターミナルが有するメリットは、①低コスト、②開港の迅速性、③緊急時対応の迅速性、④インターネットによるリアルタイムでの監視が可能であることなどであり、豊橋コンテナターミナルは、将来的に発展可能性のある港であることがわかった。



豊橋コンテナターミナルの調査研究の参加者たち。

豊橋創造大学 情報ビジネス学部 / 経営学部

プロジェクト活動



6 医療情報の学習環境構築と運営

担当教員 五味 悠一郎

診療情報管理士認定試験(以下、認定試験)合格を目的に、学内を対象とした自主勉強会の企画運営、学内外を対象とした診療情報管理士認定試験対策講座(以下、対策講座)の企画運営および宣伝活動、診療情報管理士のデジタル問題意識の育成を考えた。

対策講座の学外受講者は18名程度となり、知名度を向上させ、地域貢献することでもできた。今年度からは参加費(全1日間の講座で2万円)を徴収して運営費に充てることとした。昨年より学外受講者が減ることが予想されたが、プロジェクトメンバーの頑張りで、昨年度と同程度の学外受講者を集めることができた。

一般的に、大学の教育目的で実施するプロジェクトは連携団体の負担が大きいく、WIN-WINの関係を作れないことが多いが、本プロジェクトにおいてはWIN-WINの関係が構築できたことと評価できる。九州地方や中国・四国地方からも受講者を集めることができたのは、大きな収穫であった。

昨年度のプロジェクトの成果を、昨年度プロジェクトメンバーである学生の日中診療情報管理学会で発表し、その際、学会発表からくるもの思いもよがらぬ、新たな繋がりが生まれ、発表学生のモチベーションも高まったようである。本プロジェクトは、3月末日に完了した認定試験の合格発表後、受講生にアンケートを実施し、集計・検証を行って終了となる。本報には間に合わないが、プロジェクトの成果は今後も学会等で広く伝えていく予定である。



医療情報の学習環境構築と運営の参加者たち。

7 田原のウインドファーム～社会的企業の実証研究～

担当教員 中野 聡
協力 田原市市民環境共生推進課 計画推進グループ



本プロジェクトでは風力発電の現状と将来性を学ぶため、風車が多く存在する田原市を活動の対象に選定し、田原市役所市民環境推進課 計画推進課 計画推進グループの協力の元、社会性、事業性、将来性を調べ、検討した。特に、風力発電システムの能力供給に関して考察し、そのメリットとデメリットを整理した。その中で①環境保全と風車発電事故の軽減、②世界に繋がる、③学外コストを削減する3つの目標を掲げた。

「風」は当地域の自然エネルギーの中で最も期待されており、田原市では「環境と共生する豊かで持続可能な地域づくり」を目指すため、行政支援や補助金等の後押しを活用しながら国内最大級のウインドファームを形成している。風車は、普段遠くから見ていたためこそ改めて思ったような魅力を感じ、近くで見ると責任感なども伝わってきた。

今回は、テーマ選定からリサーチプランの作成まで、できる限り多くを学生に委ねた結果、試行錯誤の連続となったが、田原市役所の人が丁寧に対応してくださったこと、時期が経つにつれ、自分達で自然に作業を行う傾向がみられるようになった。また、学生が共同作業を通して学ぶことをそなわに楽しんでいる様子もみられた。こうした行動はこれまでの教育で行っていた点かと思われることからプロジェクト活動の効果の一つと考えられる。

2 iPad,iPhoneで利用できるアプリケーション作成

担当教員 今井 正文
協力(株)アイエスエール(株)インターネットインテック

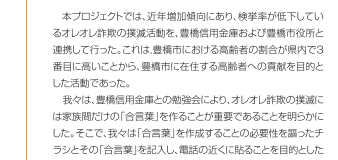


経営学部では今年度iPadが無償貸与され、教材として使うだけでなく、レポート作成のための情報収集やゼミなどのプレゼンテーション作成、就職活動などのあらゆる場面に利用されている。また、種類LAN環境も完成され、学内からでもインターネットを利用することができる。本プロジェクトは、iPadの特性を活かした学習支援アプリの作成を行った。アプリ作成を通じて開発技術や学ぶこと、学習ツールとしての効果的な活用について考えながら活動した。

本プロジェクトは、iPadの特性を活かした学習支援アプリの作成を行い、アプリ作成を通じて開発技術や学ぶこと、学習ツールとしての効果的な活用を学ぶことを目標として活動した。具体的には、授業での利用を目的とし、テスト問題の作成・配布、解答の機能に加え、学籍番号や名前等の項目表示、キーボード及び手書き文字入力、データベース接続(データ受信)の機能を有する学習支援アプリの開発を行うこととした。制作方法及び開発環境の検討については、協力企業様への企業見学で得た情報やアイビスを参考にした。なお、協力企業は、株式会社 インターネットインテック名古屋支社と株式会社アイエスエールの2社である。最終的には、2チームに分かれてFileMaker、HTML+CSS+JavaScript、PhoneGap等を用いて実際に学習支援アプリの制作を行う事を通して、チームによるアプリ開発の基礎を学ぶことができたと考えている。

8 豊橋からオレオレ詐欺をブッ飛ばせ!!

担当教員 中野 聡
協力 豊橋市市民環境共生推進課 計画推進グループ



本プロジェクトでは、近年増加傾向にあり、検挙率が低下しているオレオレ詐欺の撲滅活動を、豊橋市役所および豊橋市役所と連携して行った。これは、豊橋市における高齢者の割合が県内で3番目に高いことから、豊橋市に在する高齢者への貢献を目的とした活動であった。

我々は、豊橋市役所との勉強会により、オレオレ詐欺の撲滅には家族間だけの「合言葉」を作ることが重要であることを明らかにした。そこで、我々は「合言葉」を作成するための必要性を踏まえたチラシと「合言葉」を記入し、電話の近くにあることを目的としたステッカーを作成した。このチラシとステッカーを豊橋市内の老人クラブやスポーツ大会等で配布した。配布枚数は935枚を数えた。この活動の成果は数値化が困難である。そこで、チラシ等を配布した際アンケート調査も行い、その回答より成果を測ることとした。有効回答アンケートは225枚であった。そこでこの回答を参考に、オレオレ詐欺の対策を60%は回答対象としていることが分かった。そこで、「合言葉」を作成し、ステッカーを活用する旨が関心に関しては、99%の方が「合言葉」を作成し、95%の方がステッカーを活用するとの回答を得た。これは、オレオレ詐欺撲滅に一定の成果が得られたことを示唆するものである。



豊橋からオレオレ詐欺をブッ飛ばせ!!の参加者たち。

3 ヨシノパンプロジェクト

担当教員 加藤 尚子
協力(株)ペイカール(株)

本学に設置されているヨシノパン自動販売機の売上向上に貢献するため、プロジェクトメンバーである学生たちは様々な活動に取り組んだ。具体的には、AIDMAモデルを用いた、Attention及びInterestを向上させることで、売上向上に貢献する活動である。プロジェクト実施にあたり、本学学生による企画制作として事前調査を行い(自動販売機)、その結果をもとに企画を作成。よしのパン株式会社(ヨシノパン)の代表取締役社長、鈴木雅之氏にお時間を頂戴し、本プロジェクト企業についてのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの結果、鈴木氏よりプロジェクト実施の許可をいただき、活動を開始した。

活動開始後の具体的な活動内容についてであるが、Attention及びInterestを向上させる方法として、ヨシノパンに関する動画(3号分)を協力企業へのインタビュー及び学内アンケート等を通じて作成。学内に提示する方法を採用した。また、動画制作とともに本学学生に対してアンケートを実施した。アンケート結果及び協力企業へのインタビューから本プロジェクトでの取り組みが売上向上に貢献できた可能性が考えられている。

また、学生たちは協力企業へのプレゼンテーション、インタビュー、動画制作、約1300名にもおよびる学内のアンケート実施や分析等、多岐にわたる活動には取り組んできたが、このような活動を行い、学生それぞれがプロジェクト活動の中でのさまざまな時期に社会人基礎力を伸ばす場面に貢献できている。

9 豊橋トップインタビュープロジェクト2012

担当教員 三好 哲也
協力(株)電通(株)シライバーグループオラザラ日本店(株)



「豊橋トップインタビュープロジェクト2012」では、2011年度も引き続き、三河地区で著名な企業に訪し、企業経営の哲学やビジョンについてインタビューを行い、その内容をWEBページで公開することを活動目的とした。インタビューは、企業が求める人材についても意見を収集した。当初の予定であったが、参加メンバーの都合で、3社のトップインタビューを行った。訪問インタビューをさせていただいた企業は以下のとおりである。

7月23日 ヴァンガードラザリ日本店 代表 井内敬明氏
11月9日 WJ株式株式会社 代表取締役 片倉浩志氏
11月12日 株式会社電通 代表取締役 藤原一兵衛氏
取りまとめた記事は以下のWEBページで公開している。
<http://projectweb.soza.ac.jp/myopro2012/>

本学でのプロジェクト活動は、学生の社会人基礎力を養成することを目的としている。このトップインタビューを進めるためには、ビジネス活動と必要とされる様々な行動や思考が求められる。たとえば、インタビューの依頼、その旨の問合せ、日程調整、企業調査、インタビュー内容の検討、インタビュー後の振り返りなどの作業、メンバーで協議してスケジュールに沿って進めなければならない。以上のようにビジネス活動の疑似体験になっている。トップインタビューの経験では斬新なことも体験する中で、様々な作業に課々と取り組むことでスキルコントロールも体験する。「毎日でルーティン化して自然と自分の力が伸びるようになる」という学生への実感だけでなく、体験したことでプロジェクトになっている。

4 SOZOショップ企画・開店

担当教員 川村 和英
協力NPO法人 どんぴの会 豊橋商工会議所 豊橋市発展促進局



豊橋市広小郡にあったコピー豆販売の「SOZOチャレンジショップ」を、新たに2012年度から「SOZOショップ」としてリニューアルするためのプロジェクトとして2012年度から開始された。4名のメンバーに加えて他ゼミからの希望者を入れた合計5名で取り組んだ。また、店舗企画運営について、これまで経験のない学生に本プロジェクトを取り組ませるに当たり、第1にマーケティングと店舗運営の理解を深め、第2に民営の店舗企画の二本立てで進めた。その間、豊橋商工会議所所属の連携団体企業へのヒアリングや、広小郡商店街に設置する学生の意識調査に取り組んだ。

秋学期以降は、店舗企画を具体的に展開した。一口に店舗企画といっても、検討すべき領域は多岐に及び、学生たちには相当の覚悟と粘りが必要だった。幸いにも地理学習と具体的な企画を通して彼らのモチベーションが次第に高まり、自発的に取り組む意欲やアイデアが湧き出てきた。特に学生たちは、店長、総務経理、仕入れ、マネージャー、広報宣伝担当を決めてから、企画作業が進んだ。1月現在、学生たちの努力で、3月の開店を目指して最後の詰めを行うまでに至っている。仕入れ、商品調達にほぼ立ち、後は運営スタッフ、営業日程、人員配置、店舗運営などの細い確認ながら、店舗稼働、電飾看板、その他備品運送の段階まで進んでいる。ただし、学生たちが毎営業日に店舗に出勤することは事実上不可能なため、学生たちの店舗共担運営者を現在探している、これら未決事項は開店とすることででき、各店への協力をお願い次第である。

5 豊橋エコタウンプロジェクト～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～

担当教員 伊目 直貴
協力 豊橋市環境委員会 教育総務課

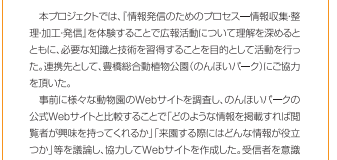
エネルギー環境問題、脱原発への対応策として、クリーンで無尽蔵である、かつ家庭など生活に身近な場所での設置が容易な太陽光発電の普及が急速に拡大している。一方で、太陽光発電は設置方法によっては発電量が大きく異なる。またシステム上の故障や発電機能の劣化などの長期的信頼性に関する課題も指摘されている。そのため、環境に関するデータの長期収集・分析が重要である。

本プロジェクトでは、太陽光発電の長期信頼性に関する基礎的なデータの収集・分析、エネルギー環境問題への意識を高める環境教育コンテンツの開発を目的に、平成23年度に引き続き、豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの稼働状況および環境教育への取り組みに関する訪問調査を行った。

調査に当たっては、学生が事前に小中学校の担当者と日程調整を行った。その後の訪問時に、システムの種類・稼働率、調査の有無、環境教育への活用状況などを確認するとともに、設置トラブルならびに環境教育への活用状況などの取組も行った。昨年年度は全44校中17校の調査にとどまっていたが、今年度は74校全てを訪問した。その結果、その2年間のシステムへの導入のトラブルが5件発生していたことが分かった。また、平成14年度に設置された最も古いシステムでは、近年の発電量が大幅に低下していることが分かった。この原因がシステム上の劣化によるものなのかどうか、今後、日米比較と比較によるより精密な分析によって判断する必要がある。

10 のんぽいパーク盛り上げ隊

担当教員 三輪 多恵子
協力 豊橋総合動物園公園



本プロジェクトでは、「情報発信のためのプロセス」情報収集整理・加工・発信を体験することを通じて広報活動について理解を深めるとともに、必要な知識と技術を習得することを目的として活動を行った。連携先として、豊橋総合動物園公園(のんぽいパーク)に協力を頂いた。

事前に様々な動物園のWebサイトを調査し、のんぽいパークの公式Webサイトと比較することで「どのような情報を掲載すれば閲覧者が興味を持ってくれるか」「求職する際にはどんな情報が役立つか」等を議論し、協力してWebサイトを作成した。受信者を意識した情報発信を心がけ、アイデアを実践する機会を設けたことは、講義では得られない貴重な経験になったと考えている。また、情報収集の際に何度もインタビューを行った経験は、聞く力・話す力を養成できる(成長する必要がある、と気づく)原動力になった。始めはぎこちなかった取材も、回を重ねるにつれて、笑いと交差しながら引き出すことができようになり、学生の成長を実感した。

動物に関する情報だけでなく、「1日1万歩」を達成するための協会の商品紹介や、周辺飲食店の紹介も対象を広く、多様な情報発信を促すことで、学生の課題発見力や実行力、主体性の成長にもつながると感じている。様々な調査・取材を通して、のんぽいパークを中心とした地域社会の成り立ちや、そこで働く様々な人々の働きについて意識が深まったことは、今後、就職活動を行う学生達にとって非常に有意義な経験になったと考えている。

11 豊橋献血促進プロジェクト

担当教員 山口 清
協力 愛知県赤十字血液センター 豊橋出張所



近年、若年層の献血離れが深刻であり、将来的に手術などで使う輸血用血液量が不足する恐れのあることと指摘されている。本プロジェクトは、主として献血(血)の献血率向上を目的として、豊橋市における若年層(本学学生を含む)の献血率向上を主目的とした活動をを行った。

具体的には、(1)献血呼びかけボランティア活動、(2)若年層の献血に関する意識や態度の調査(学内・学外調査)、(3)若年層の献血の現状や従来からの取り組みに関するヒアリングと意見交換(愛知県豊橋赤十字血液センターの音橋)と、(4)プロジェクトメンバーの構築および献血関係者の発信、の4つを行った。なお、構築したWebサイトは「豊橋 献血促進」でWeb検索すると閲覧できる。

若年層の献血率低下は社会問題として認知されておき、簡単に解決できない非科学的な課題である。学生達は、多くの議論を重ね、献血意識調査用紙の作成やWeb記事作成(広報)を行った。また、調査結果の分析を通じて家族・友人に誘われて献血を体験する人が多くいることを見出し、血縁者の方々へのヒアリングを通じて「若いうちの献血量が重要」であることが分かった。これを受けて、現在は、来る月の学内献血会において一人で多く献血の経験の多い学生に献血を体験してもらおうと活動に活動を継続中である。学生達は、プロジェクトの実践を通して、「課題発見力」や「計画力」「実行力」、そして、「発信力」「継続力」など、重要な社会人基礎力を養成することができたと考えている。

平成 24 年度

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」
『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』成果報告書

平成 25 年 3 月 27 日 発行

編集発行 豊橋創造大学短期大学部
地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会

〒440-8511 愛知県豊橋市牛川町松下 20-1

TEL 0532-54-2111

FAX 0532-55-0803

<http://www.sozo.ac.jp/>

